モーム文学の思想性
―魂の解放を求めて―
（『剃刀の刃』）

高宮城　　繁

モームとは（序にかえて）

モームに対する評価は毀誉褒貶相半ばする。彼に組するもの、彼を扱き下ろすものと様々である。だが、批評家や文学関係者の言がどうあろうとも、サマセット・W・モームは英国の生んだ二十世紀最大の文豪の一人であり、詩を除けば、そのジャンルも実に多様で、彼は劇、長篇小説、短篇小説、随筆、評論、紀行等々の分野で才筆を存分にふるっている。モームは、1874年（明治７年）に知的雰囲気の高い家庭に生まれ、その後1965年（昭和40年）まで、実に91年間に亘る天寿を全うしている。そして最初の作品『ラムベスのライザ』（1897年〈明治30年〉）から『Selected Prefaces and Introduction』（1964年〈昭和39年〉）までの67年間の作家生活で、実に170有余の作品（長篇小説20、短篇小説102、戯曲32、紀行・エッセイ15、編著５）を物にしている。

このように厖大な量の作品を世に問う中で、彼は《In my twenties the critics said I was brutal, in my thirties they said I was flippant, in my forties they said I was cynical, in my fifties they said I was competent, and now in my sixties they say I am superficial.》[1]と蔑称され、通俗作家としての烙印を押されながらも、人間性の追求に飽くことを知らないほどの精力を注ぎ続けたのである。この通俗性という観点に立ってモームの作品を評価する向きに対して、田宮虎彦は《モームは通俗作家として位置づけられているようである。しかし、通俗小説とはいったい何か。小説が面白くなければならぬということは自明のことだ。面白くない小説などありうる筈がない。そこに純粋と通俗のへだてはあってはならぬのである。だが、世にいういわゆる通俗小説が、人間の真実をゆがめて、その歪みの中に読者をひきつけてゆく面白さを求める時、それはもはや小説ではなくて、奇怪な読物にすぎない。小説とは、逆に歪んだ現実の中から人間の真実を求めてゆくものである。とするならば、モームの小説はけっしていわゆる通俗小説ではない。モームほど人間の真の姿を求めようとした作家は少いであろう。モームの作品にひめられた根底には、常に「人間とは何か」という設問がある。モームの小説はすべてそれに対する答である。それは完全に答えきれていないかもしれぬ。たとえば、『月と六ペンス』のストリックランドが、己れの描きあげた最後の絵をアタに焼きすてさせたように。しかし、不完全な解答であるとはいえ、モームの作品の中には、完全に生きようとする人間の願いが、もつれあう叫喚と嗚咽となって聞え、それが私たちの心をゆすぶらずにはおかぬのである。》[2]と、その不当性を論断している。

モームのいわゆる通俗性の背後に潜む彼の人となり、即ち、性格は、両親との幼少時の死別、無知蒙昧で暴君的な存在だった伯父（牧師）から受けた冷遇、彼に対する牧師館や学校での不信感・侮蔑感、英国国教に対する絶望感等々の様々な屈折した感情、それに生来の虚弱体質、短軀醜面、吃音、フランス訛りの英語等々の諸要素が重なり合って、形成されたようである。モームの作品には彼自身の投影図としての登場人物たちが多いが、それらの人物たちの思考様式を規定づけている要因として働くのが今みた種々の彼の性格要素である。例えば、『人間の絆』のフィリップ、『月と六ペンス』のストリックランド、『剃刀の刃』のラリー、『カタリーナ』の僧正ブランコ等々は多かれ少なかれモーム自身の分身であり、その思考にモームの性格の影が映っていることは、彼の『サミング・アップ』とこれらの作品を合わせ読むだけで、自ずと理解されるものである。

通俗といわれようが、何といわれようが、兎に角、モームは多作な作家であった。そういう彼の存在を快しとしない批評家たちは、彼を単なる通俗的なストリー・テラーとしてしかみない。そういう見方に対し、モームは開き直るような形で

The novel is a form of art, perhaps not a very exalted one, but a form of art nevertheless. It is not concerned with instruction. It is not concerned with reform. It offers entertainment and if it is a good novel it offers intelligent entertainment. People who are interested in juvenile delinquency, the prison system and so forth would be better advised to read the books written about them by the experts on these particular subjects. The proper aim of the novelist is to create characters and devise a story which will enable him to display them. If you like to call him a mere story teller of course you are at liberty to do so ..... The point I want to make is that the story teller by the nature of his gift, by his peculiar feeling for the circumstances of his time, by his choice of people to write about, by the kind of stories he tells offers a criticism of life. He may not know he is doing this, it may be far from his intention, but he does it willy-nilly. My conclusion is that there is no such thing as a mere story teller[3].

と論駁する。小説は芸術の一ジャンルをなすが、教訓とか革命のような社会事象をこえたところの知的楽しみを与えるものであり、小説家の本分とするのは登場人物に性格を付与し、彼等が息吹く物語りを創出することにあるとし、小説家というのは単なるストリー・テラーではなく、人生評論を展開する任務をおびるものであると論ずるのである。

モームは人間の性格を形成する社会環境、即ち、政治、経済、社会、文化等々の情況を作品の対象にする作家ではなく、あくまでも社会環境の成果として誕生した人間の内面に生起する因果報応としての心象を描くのに精を尽くした作家であった。彼の創造する人物群は、彼等自身の人間的対応関係において描かれ、第一次基層としての社会や政治や経済や文化の諸

現象に拘束されるものではなく、それらを踏襲しながらもそれらに触れることはなく、あくまでも第二次層としての人間相互の関係において描かれているのである。だから、彼の作品には社会や政治や経済や文化等々に真向うから取り組むという情況小説的な色彩はみられない。人間の深奥からにじみでてくる性格要素を問題にはするが、それらの形成因子としての環境要素はそれほど問題にはしないのである。だから、彼は旅はしても、その行く先々の人々の生活様式、風俗習慣、組織的活動、自然の風物等々にはそれほどの興味を示すことはない。それらは彼の作品の素材としてはあまり役に立たないからである。彼の関心の的となるのはいつでも人間である。彼が問題にするのはあくまでも人間であり、人間の内部で葛藤し合う喜怒哀楽の感情であり、人間相互の関ぎ合いであり、ぶっつかり合って摩滅しあっている人間の業であり、人間の性である。たとえば、『剃刀の刃』の主人公ラリーの精神行脚でもその動機としての社会性、即ち、戦争と人間の関係を具体的に問うことはなかった。戦争の結果として生じてきた人間の煩悩と生への苦渋にみちた歩みをモチーフとはするが、因果論的な手法でその動機に深く立ち入り、社会や政治を論じようとはしなかった。政治、経済、社会、文化等々を人間活動の依って拠つものとして視野の片隅にはおきながらも、それらに直接的に触れることはなかった。人間の生の営みを多分に規定する外的要件としての政治や社会の問題に言及することなく、時間を超越する形で存在し続ける人間性の矛盾要素をテーマにしたことが却ってモームの作品の価値に永遠性をもたせる結果になったとロバート・L・コルダーは指摘し、そして《モームは生きのこって将来の世代に読みつがれることだろうが、これは、彼がいつも主張していたように、彼が基本的には物語の語り手であり、そのむかしのキャンプの火のまわりでの話の語り手に似ているからである。俗語的表現と陳腐なきまり文句をつかっているのは、将来の読者にとっては彼を傷つけることになるだろうが、散文の書き物で彼の時代の政治的、あるいは社会的動乱に言及したものがほとんどないという利点をもっている。愛情、憎悪、殺人、自殺、信念、疑惑のテーマは時を超越したもので、人間の自由探求をあつかっていることは、人間にたいする科学技術と環境の支配が強くなるにつれて、ますます重要な問題になるだろう。》[4] と論ずるのである。一考に値する評言であろう。

モームがその作品群で主張するのは人間性不変の論理である。彼は人間性の本質は時代の動きや場所の変転等によって変るものではないと主張する。勿論、時や所の移り変りによって人間の生き様は多種多様なものとなるが、それとて、煎じ詰めれば、表面的な現象であり、畢竟、人間というのは生活様式は様々に変ってもその本質的な存在はみな同じであるという。善と悪、高潔さと卑劣さ、強さと弱さ、美しさと醜くさとが同じ人間の内部に同居するという自己矛盾にみちた存在をなすのが人間であり、そういう二律背反的人間性を基調として全体的にもっともらしい調和を保っているのが人間である。そういう人間像は人類生誕以来今日にかけて変ることのないものであり、結局、人間とはその本質において今も昔もちっとも変らない存在であり、その表皮としての種々の形式が変るにすぎないという人間の不変なる存在形態を彼はその基本的な像としてすえる。それゆえ、この人間不変の論理、即ち、相異

なる両極性としての矛盾要素をかかえるのが人間であるという論理が彼の作品の登場人物たちに投影されるのは筆勢の赴くままであり、モームにとってはごく自然なことであるともいえる。人間の本質は矛盾の塊りであり、表面的にはもっともらしい調和をみせてはいても、一旦、内部に踏み込めば、相矛盾する要因同士がぶっつかり合い、摩擦し合い、せめぎ合い、ごり合っていて、その本質は何であるかよくわからないという考えを持ち、そこから人間存在の不可知論がでて、それがモームの人間像造型の基本原理となるのである。竹内正夫氏は『月と六ペンス』に登場する人物群の人間の不可解性についての言説を《……「人生には、何の価値もない。」とか、「世界は冷酷なものだ。我々は、何故かも知らずに、この世に生れ、誰も知らないどこかへ去って行く。運命の眼にも気づかれない程.そっと一生を送るべきだ。」とか、「どんな残酷な事が起っても、世界は、依然として、同じ世界だ。何の影響もない。いたましい他人の不幸によって、誰一人、どうという事はない。」といったような否定的な人生観照が散見するが、それにもまして、強い印象を受けるのは、人間の不可解性についての言説である。たとえば、「人間の心は、矛盾に満ちたものであり、誠実な人間の中にも、多くのポーズがあり、高潔な心の中にも、不純があり、背徳者の中にも、善意がある。」とか、「一人の人間の心の中には、卑小と崇高、敵意と慈悲、憎悪と愛とが並んで存している。」とか、「人間という予測を許さぬ不可解な存在については、なに一つ確実な事はない。」とか、「誰が、人間の心の微妙さを、はかり知る事が、出来よう。」とか、「今では、人間を見る眼が相当に出来て、人間というものが、いかに解らぬものであるかを、知ってしまった。」などという彼の全作品を貫く主題である人間不可知論的言説が、所々に色濃く打出されている。この作品の人物群の言行も、結局、それの例証が多い。》[5]と概観し、そこにモームの不可知論者としての姿が散見されると指摘している。

モーム文学のモチーフは人間性追求をその基調とする。時や所から生起する諸条件に左右されるという物理性をこえ、モームは飽くことなく、筆勢の赴くまま人間の本質を描きあげるが、前にも述べたように、人間の生の営みを彩る外的条件は作品の道具立て程度に利用するだけで、それらに真っ向うからテーマとして取り組むことはない。彼は人間個人の本性の研究に終始する。この姿勢の背景にはモーム一流の文学観が働いているのである。彼は作品の創作にあたっては、政治、経済、社会等々人間の生活を規定する外的物理要件はテーマの埒外におくべきもので、文学はその固有の領域、即ち、人間の本質を理念的に追求する次元に終始すべきであると考え、そうすることによって芸術のジャンルを純粋に保つことができると考える。人間の生き方を多分に規定するという意味で欠かせることのできない外的物理要件をどう処理し、どこまで道具とさて使うかについては一概に云々できるものではなく、それは一に文学者の能力とか執筆感覚に依るものであるとしかいえない。このことはモチーフの展開に直接間接に係る問題として検討を要するものであろうが、本論文においてはそのことは問わない。兎に角、モームは人間の内部に巣くう相対立し合う矛盾同士の葛藤現象に主眼を注ぎ、『月と六ペンス』の主人公ストリックランドや『剃刀の刃』の主人公ラリーにみ

られるように、その矛盾の由来についてはそれほど問うことはしない。彼は徹底して〈人間の本性とは何か〉を追求した作家であった。

作家はその作品において自己の苦悩を表現し、そうすることによって自己解放を覚えるという。だから、自己を投影できる人物を創作し、それを通して自己の苦悩を吐き出すわけである。そうすることによって自己脱脚ができ、苦渋にみちた人生のカタルシスとすることができる。モームの作品の主題は概ね〈精神の自由の探求〉であり、作中人物の魂の遍歴を通して自己解放をはかるという求道性を作品の内容とするものである。たとえば、彼の長篇小説『人間の絆』(1915年)、『月と六ペンス』(1919年)、『お菓子と麦酒』(1930年)、『剃刀の刃』(1944年) 等々を読めば精神の自由を追求することがモーム文学の主要テーマになっていることが容易に理解できる。そういうモームの精神の自由の原型とも称すべきものに関して、山本幸男氏は《*Of Human Bondage* の主な筋は Philip Carey の思春期体験の上に構築されているが、Mildred なる女性に痛ましいほど、あるいは醜いほどに執着していた Philip がついに自らの「愛」がただ情念の作り出す幻影を追っているにすぎないことに気づき、人生には意味がなく、death without consequence という認識を得た時にようやく心の安らぎを覚えるという、いわゆる不可知論的な取り扱いのなかに Maugham の「精神の自由」の原型がある。》[6]と論ずるが、モーム文学の自己解放論を説明するために必ずといってよいほど引用されるのが『サミング・アップ』の次のくだりである。

For the disadvantages and dangers of the author's calling are offset by an advantage so great as to make all its difficulties, disappointments, and maybe hardships, unimportant. It gives him spiritual freedom. To him life is a tragedy and by his gift of creation he enjoys the catharsis, the purging of pity and terror, which Aristotle tells us is the object of art. For his sins and his follies, the unhappiness that befalls him, his unrequited love, his physical defects, illness, privation, his hopes abandoned, his griefs, humiliations, everything is transformed by his power into material, and by writing it he can overcome it[7].

作家は自己を全体的にあるいは部分的に語りうる人物を創造することによって自己を解放し、心の平安を得ることができるわけだ。このように自己解放のため、あるいはオブセッション解消のために特定の登場人物を創出するという観点に立てば、作家にとって社会的毀誉褒貶はそれほど問題にならないわけである。作家の創作活動は、作品を売り、金をため、物質的に豊かになりたいというよりも、心の重荷を取り払い、その結果生ずる精神的な解放感に自己満足を覚えたいという願望に基づく純粋な精神行為であるともいえよう。芸術は本質的に一種のカタルシスであり、芸術家が作品を生みだすのは、そうすることによって彼は魂の解放をすることができるからであるとモームは次のように論ずる。

He does well only to write to liberate his spirit of a subject that he has so long meditated that it burdens him, and if he is wise he will take care to write only for the sake of his own peace[8].

The artist produces for the liberation of his soul. It is his nature to create as it is the nature of water to run down hill. It is not for nothing that artists have called their works the children of their brains and likened the pains of production to the pains of childbirth. It is something like an organic thing that develops, not of course only in their brains, but in their heart, their nerves, and their viscera, something that their creative instinct evolves out of the experiences of their soul and their body, and that at last becomes so oppressive that they must rid themselves of it. When this happens they enjoy a sense of liberation and for one delicious moment rest in peace. But unlike human mothers they lose interest very soon in the child that is born. It is no longer a part of them. It has given them its satisfaction, and now their souls are open to a new impregnation[9].

最後の数文にみられるように、一つと作品を物にしてしまえばそれで事が全て終ったわけではない。作家の創作衝動は一所不在的なものであり、頭脳の働きが柔軟であり、思考に斬新さがみられ、自己表出意欲がある限り、いつまでも続くものである。一つの作品が完成すれば、その分だけカタルシスを覚えるが、そこでとどまるわけではなく、また、次の作品を通して新たなオブセッション解消をはからなければならないのである。モームは戯曲から小説へ、小説から随筆や評論や紀行へと時を逐って自己表出の手段を変えていったのである。それは全て連動的な創作衝動に駆られた結果であり、自己解放の手段となるものであったのである。作家、画家、あるいは音楽家は人生の喜怒哀楽に誰よりも敏感である。人生の喜びや悲しみをほかの人間よりも鋭敏に感じとるのである。そういうすぐれた感覚的経験が一定の期間心にとりついたものとなり、それから何とかして解放されたいがために、その手段としてそれに創造的表現を与えずにはおれない気持ちになるのである。『人間の絆』のフィリップ、『月と六ペンス』のストリックランド、『剃刀の刃』のラリー等々は直接間接にモームの分身であり、彼等の思考と言動にはモーム自身の投影があり、彼はそれらの人物を通して自己の内面を表白し、心の重荷から解放されているのである。だが、モームは決して永遠なる自己解放を覚えることなく、したがって彼は決して筆を擱くことはなかった。彼は84歳の時に出版した『Points of View』(1958年－評論集) をもって60年に及ぶ作家生活に終止符を打つと宣言したが、その後も『Purely for my Pleasure』(1962年－解説つき画集)、『Looking Back』(1962年－自伝)、『Selected Prefaces and Introductions』(1964年－エッセイ) 等々を世に出し、意気おとろえざるものをみせた。モームは心身の機能が許す限り、心の中の憑き物から解放されるために、熱心に書き続けたのである。

モームの諸作品における〝自己解放への道〟は観念的、あるいは物理的に世俗を脱し、超道徳的アモラルの世界に身をおくという形をとる場合が多い。『人間の絆』の主人公フィリップは世俗的情念の絆の一切を断ち切ることによって精神の自由を身にする。『月と六ペンス』の主人公ストリックランドは妻子や家をすて、世俗との係りを一切断ち、芸術の世界に自己解放を求め、また、『剃刀の刃』のラリーも同様に宗教の世界に魂の平安を求めて行く。ラリーは精神行脚の旅路で遭遇する四人の誘惑者(イザベル、エリオット、シュザンヌ、ソフィー)を果断に切ってすて、そして物質的栄達への道をも自ら閉ざし、精神的孤高性を全うし、究極において自己の目指す精神の解放を〝山頂の悟り〟を得て達成する。この三者の魂は平安を求めて諸行を遍歴するが、その過程には実に超俗的なアモラルな生き方がある。これらの作品の主人公たちの生の軌跡をみると、彼等は彼等の志向するものを達成するために、その途次で次々と己れに係り合ってくる世俗的なものに対し、果断なる措置をとっていることがわかる。そして、究極において、彼等はその目的とする精神の自由を手に入れることによって超俗的な意味における成功者となるのである。結局、超俗の世界に身をおくことは通俗的な我執の心を去った境地に己れをおくことである。そうすることによって人間は純一無雑な至高の精神領域に到達することができるのである。

自己解放への道は善を最高の属性とする神へ接近する路程を意味するものである。その過程にみられるのは没我の境地であるが、この心境に則った善の逐行こそ美そのものであるとモームは賞讃する。モームは、一般的意味において、芸術美の人間に与える影響力について

It is an excitement that gives me a sense of exhilaration, intellectual but suffused with sensuality, a feeling of well-being in which I seem to discern a sense of power and of liberation from human ties; at the same time I feel in myself a tenderness which is rich with human sympathy; I feel rested, at peace, and yet spiritually aloof.[10]

と語るが、しかし、モームにとって人生最大の価値は善である。モームは人間の存在が単なる生物学的な存在ではなく、それをこえて有意味なものになる次元性を付与するのは真であり、美であり、善であると考える。そしてこの三つの価値の体系の中で彼が思索を重ねて最後に到達したのが善である。美というのは善と結びついてこそ真実の美となるものであり、従って善は美の内質を決定づける重要な要素となるわけである。善に裏付けられた真実の美とは、人間に謙虚さとは何か、忍耐とは何か、寛大さとは何か、分別とは何か、崇高さ（気高さ）とは何か等々を教えるものでなければならないと説き、事物の現象的な皮相に美があるのではなくて、真の美とは人間を正しい行動へと駆り立てる内発性をもったものでなければならないという。そして彼は《The beauty of life,------, is nothing but this, that each should act in conformity with his nature and his business.》[11]と人生の美を謳い、人間は各々己れの本性に則って己れの本分を全うする行動をとるべきで、その過程にこそ人生の美

はあると述べるのである。

人間は本質的に自由意志を持ち得ず，己れの生誕と共にその周囲に張りめぐらされた様々な環境要素によって意志の決定を迫られるものであるとする機械的決定論を信奉しているのがモームであるが、それにも拘らず、彼は純粋で無私に徹した人間の中に善を見い出し、それには人間を拘束する種々の要素からの解放があり、人間としての意志的独立性があると考え、

It may be that in goodness we may see, not a reason for life nor an explanation of it, but an extenuation. In this indifferent universe, with its inevitable evils that surround us from the cradle to the grave, it may serve, not as a challenge or a reply, but as an affirmation of our own independence.[12]

と論ずる。無私没我の状態で善を逐行する人間は機械的決定論に挑戦し、自己の意志を貫く。そういうところに自由人としての生き方があり、それこそ超然たる生き方であり、礼讃されて然るべきものであるとモームは考える。環境に隷属し、自己の真の主体的な意志を返上し、決定論的な生き方をするか、あるいはそれをこえて超然とし、自己の主体性を高揚し、自由な生き方をするか、そういう二者択一の道しか与えられていないのが我々人間であり、そういう〈自由と隷属〉がモーム文学の終始変りなきテーマをなしていたと論ずるのはコールダー[13]である。貧民窟のライザ(『ラムベスのライザ』)、ミルドレッドに振りまわされ拷問の苦しみを経験するフィリップ（『人間の絆』)、清教徒的因襲を超然と無視するロウジー（『お菓子と麦酒』)、既存の一切の生活体系をすてて、一心に絵を描くストリックランド（『月と六ペンス』)、アメリカの唯物思想からの脱出をはかるラリー（『剃刀の刃』）等々いずれもモチーフは同じで、〈自由と隷属〉である。このテーマに関連し、コールダーは《個人をとり巻くさまざまな形をとった制約と、魂の真の解放に直面してぶっつかってくる困難をモームは探求しているが、これは二十世紀文学にたいする大きな寄与である。反抗と疎遠の文学には、疑いもなく、モームよりもっと力強い完璧な表示はあるものの、社会の要求と個人の要求のあいだに妥協点をみつけようとする彼のこころみは、考慮すべき価値をもっている。》[14]と評価している。モームは上記の登場人物を通してオブセッションの解消を試みるが、それは我執を去って善を実践するところに真実の美があり、そういう没我の心域に立ってこそ自己の解放は可能であると考えるからである。彼は『人間の絆』で情念の束縛から脱出する方法を、『月と六ペンス』で美の追求を、『ペインテッド・ヴェイル』で善の追求を、『剃刀の刃』で真実の追求をそれぞれ没我の境地に求めている。このように自己解放の手段として用いられるモームの作品上の没我性を相良次郎氏[15]は三つのカテゴリーに分けて考察している。即ち、『人間の絆』のアセルニー一家、『月と六ペンス』のストルーブ、『お菓子と麦酒』のロウジー等々の性格を形成する人間的美質を〈生来の無我〉とし、『人間の絆』のフィリップ、『剃刀の刃』のラ

リー、『カタリーナ』の僧正ブラスコ等々に代表される人々の性格的美質を〈努力乃至苦難の結果の無我〉とし、『月と六ペンス』のストリックランドの性格に代表される職人的な美質を〈物に憑かれた結果の自我—時には自棄からくる無我〉と類別して考えるが、モームが最も礼讃して惜しまないのは〈生来の無我〉である。それは純無垢なるものであり、神々しきまでに美しいものであり、それ自体が償いを求めない偉大な人間的美であると考え、モームは《Goodness is the only value that seems in this world of appearances to have any claim to be an end in itself. Virtue is its own reward.》[16] と述べる。求道性をテーマにしたモームの作品はいずれも道を求める過程に没我性を見い出し、それこそ人間性の最も美しい資質であると称揚する。余談になるが、そういう美質を性格要素とする主要登場人物たちと、自我を棄てることのできない人物たち（『人間の絆』の女画学生プライス〈名声のみを求める〉、『月と六ペンス』のストルーヴ夫人〈所有欲〉、『剃刀の刃』のイザベル〈物質的精神的独占欲〉）とを対置することによって、前者を絶妙なまでに浮き彫りにするという対照描写の効果をモームは存分に生かしているのである。いずれにせよ、モームは自己脱脚の手段として多くの作品を世に問い、その評価をそれほど気にすることなく、己れに取り憑いていた諸々のものを吐瀉し、自分の心の中の整理をはかったのである。それは文字通り、煩悩と業の束縛からの脱出行為であり、精神の自由を求める勤行的作業であり、そこには解脱の境地を求めて懸命に苦行を重ねる一作家の悲壮な魂の姿が生々しくみられるのである。モームの執念深き創造的表出作業は、詰まる所、カタルシスそのものであったのである。

モーム文学の思想性とその発展的経路

モームは、前述したように、人生評論としての無類のストリー・テラーであり、不可知論者であり、世紀末的唯美主義的傾向をもち、善と悪の探求に倦むことを知らないほど精力を注ぎ、人間の本質とは何かをたえず眼中において物を書いた作家である。彼の長篇小説は人間の現実即応的な性格研究と理想主義的な理念追求を基調とするが、そのうちの幾冊かを読めば、彼の思想的発展の順序を容易に辿ることができる。

モームの最初の作品『ラムベスのライザ』（1897年）は貧民街の若い娘の哀史を綴ったものである。彼は、医学修業時代に、スラム街で飾ることのない赤裸々な人生の実相にふれ、真実を描写することのみに一切の価値はあるとし、そういう考えをもって彼は生涯にわたる真実追求の基本姿勢としたのである。彼は虚飾を必要としない人間こそ最も本質的な意味での人間性をもつものであると考え、最初の作品のテーマを1890年代のロンドンのバーモンジ地区（貧民街）に求めた。医学修業の産物として、あるいはモーパサンの影響を受けて培われた客観性を重視する臨床主義に依り、彼は貧民街に住む人々の生き様を冷静に醒めた眼をもって観察し、その成果を『ラムベスのライザ』に投与している。この作品はリアリズムの典型といわれ、それが世に出た頃はまだ世紀末的な自然主義あるいはリアリズム全盛の時代

で、フローベルやモーパッサンの影響を濃厚にのこしている頃であった。この作品の特色に関し、相良次郎氏は《この作品がリアリズムの粋と言われる所以は、貧民街およびその生活が雰囲気と共に鮮やかに描写され、市井の人物の性格が見事に丸彫りされ、日常的な出来事が迫真的に描写されている為だけではない。リアリズムがロマンスと異なる窮極の特性は、後者が意志の自由を謳いあげるのに対して、前者が人間の意志を蹂躙する運命、人間が負わされた条件あるいは業を、克明に研究していることであろう。潑溂とした若々しい生命にあふれた美しいライザが、幸福を約束されているようにみえながら、美しい女体あるいは愛さえもが、彼女にとっては運命の力となり、貧しさや、周囲の人々と協力して、彼女を、一歩一歩みじめな境涯、そして死へと、ひきずりこんでゆくのである。》[17]と述べている。冷酷な運命に翻弄され、死にいたらなければならなかった18歳の少女の姿は実に痛々しく、悲しいものである。この作品は人間は一個の脆弱な生物学的存在であり、それは適者生存の自然法則の粋組みから一歩も外にでることのできない無力な存在であるとする自然主義的な決定論的思想をその背景におくものである。モーム自身のこの思想に関する見解は次の如きものである。

The scientific world of which I thus obtained a cursory glimpse was rigidly materialistic, and because its conceptions coincided with my own prpossessions I embraced them with alacrity; 'For men,' as Pope observed, 'let them say what they will, never approve any other's sense, but as it squares with their own.' I was glad to learn that the mind of man (himself the product of natural causes) was a function of the brain subject like the rest of his body to the laws of cause and effect, and that these laws were the same as those that governed the movements of star and atom. I exulted at the thought that the universe was no more than a vast machine in which every event was determined by a preceding event so that nothing could be other than it was. These conceptions not only appealed to my dramatic instinct; they filled me besides with a very delectable sense of liberation. With the ferocity of youth I welcomed the hypothesis of the Survival of the Fittest. …… I believed that we were wretched puppets at the mercy of a ruthless fate; and that, bound by the inexorable laws of nature, we were doomed to take part in the ceaseless struggle for existence with nothing to look forward to but inevitable defeat.[18].

この儚い人間の存在、それをがんじがらめに束縛する決定的機能を担う運命、それに抗する術をもたない弱者としての人間の姿、そういう生き身をひっさげて懸命に苦闘する人間の生き様にこそ人間の本質は探れるのであり、この真実の探究こそ価値があるのだとするモームの思想がこの作品の底流をなしていることは論ずるまでもないことである。

モームの最大の傑作であり、20世紀古典文学の一つに数えられる『人間の絆』(1915年)は、

主人公フィリップが、精神的自由の境地に到達するために、種々の偏見や固定観念を脱脚していく人間苦闘の物語りである。究極においては、世俗的情念の一切を断ち、己れを空しうしうしてこそ真理の実相は認識することができるという悟りを開くが、そこにいたるまでのリアリステックな人生観がこの作品には克明につづられている。

『人間の絆』のモチーフは真理認識の過程において真実をどう追求するかにあり、宗教的偏見や与えられた既成概念としての神を否定し、善の実践者としての行動力と豊かな常識をもってなおかつ並みの人間をこえる人格をもった神を求める点にある。主人公は、我意をすて、善を実践し、それを社会的に有用化する過程には実質的な神の姿がみられると考える。これはモームの考えそのものである。相良次郎氏は、モームの短篇『裁きの坐』でモームが語っているのはおそらく、《我意を捨てて、知性の目を開き、素朴に生きること、即ち美に達し善を行う道である。善は神の本質であり、また彼は全能でもあるのだが、結局においては、悪をなくするとしても、俄かにすべてを正すことは困難である。人も亦神の意を体して、己れを空しうして真理を実現する努力をしなければならない。》[19] のようなものであろう、と述べている。これはそのまま『人間の絆』の主人公にも当てはまる言葉でもある。真理を認識し、それの実現をはかるには先ず己れを空しくするという没我の精神が必要となる。己れを空しくして善を実践する人間の内心に宿るものこそ神の姿であり、それは、現実に有用化される人格をもった神という意味で、まさしく人格神である。主人公フィリップの志向する神は全能な神(all mighty)と十全なる神(All-goodness)との調和のもとに現実化される人格神である。だが、何といっても、この作品全体を貫くモチーフは〝人生とは何ぞや〟という人生論であろう。

人間は宇宙の一分子であり、宇宙を支配するメカニズムは目的のない物理としての自然淘汰的法則であり、人間の運命は自ずとそういう法則に左右される。だから、人間の日々の営みは機械的に決定されたものであり、自らの意志によってはどうしようもない支配構造のもとでは、人間のもつ生の目的は全く空しいものであり、それゆえ、人生とは無意味なものであるという考えがこの作品において展開される人生論である。そういう論理を認めた上で、結局、モームは小市民的な精神の安住の地をアセルニー一家に求め、そこに展開される人間模様に美と善が一体となった人格完成の姿を認めるわけである。この姿こそモームが賞讃してやまないものである。彼は美は善の裏付けがあってはじめて真実の美となり、無欲になって善を実践する行為こそが人生の真の美であると考える。フィリップは、サリーとその一家に象徴される善意に触れ、没我の赴くままに人生を生きようと精神的安らぎを感じる。結局、モームは、コールダーが指摘するように、主人公フィリップを体して、個人の要求と社会の要求の間に妥協点をみつけ、人間臭みのある人の生き方を肯定しているといえよう。これが『人間の絆』の終幕が意味しているものである。

フィリップは究極において無我の境地に己れをおき、心の解放を克ち取るが、その過程は苦労の連続であり、忍従を次々と重ねるものであり、情緒的混沌の最たるものであった。孤

児、蝦足という心身を傷めるハンディキャップを幼少の頃から背負い、必然的に内向的になった人間が《……二重の十字架を負わされつつ如何に人生に悩み、如何に人生に求め、如何に人生に裏切られ、如何に人生を解いて行ったかの物語……》[20]が即ち『人間の絆』である。いばらの道を通り、身に絡らみつく諸々の情念を断ち、無我の境地になって人の善意をあるがままに受け入れることにこそ魂の救済はあると終の悟りをフィリップは得るが、そのへんの事情について朱牟田夏雄氏は《何かの理想とか慾望とかに縛られてとりこになっている状態、それがすなわち人間が絆にとらえられている姿である。人間の幸福あるいは安らぎは、それら諸々の絆を脱した時に始めて生れ出る。これがこの小説でフィリップが到達した結論であり、また『サミング・アップ』その他でモームが展開している人生観である。「幸福の谷」をさまよい出て人生の幸福を探し求めたジョンソン(Samuel Johnson, 1709－1784)の『ラセラス』(*Rasselas, Prince of Abyssinia,* 1759)の物語がかって粗朴な形で説いた所も結局はこれである。求める心を去って何ものをも静かに受け入れる心境、これがフィリップが長い人生行路の後に到り得たゴールなのであった。》[21]と記述している。この〝求める心を去って何ものをも静かに受け入れる心境〟と人生を達観する心域にまで、諸々の情念を断ったフィリップは己れを昇華させるのである。これは人間的に成熟期を迎えるモーム41歳の時の考えであり、その後20年経って、モームは『サミング・アップ』で

……, but I have never quite lost the sense that my living life was a mirage in which I did this and that because that was how it fell out, but which, even while I was playing my part in it, I could look at from a distance and know for the mirage it was. When I look back on my life with its successes and its failures, its endless errors, its deceptions and its fulfilments, its joys and miseries, it seems to me strangely lacking in reality. It is shadowy and unsubstantial.[22]

と論じ、人生とは正しく唇気楼の如きもので、実在感に欠け、影の如き存在で、どうにもつかみどころのないものだと不可知論的な見解を示している。また、モームは70歳のときに序文を付して出版した人生行脚日記とでも称すべき『作家の手帖』で，

……, but now I am an old man, I can be no one's rival, for I have retired from the hurly-burly and ensconced myself not uncomfortably on the shelf. Any ambition I may have had has long since been satisfied. I contend with none not because none is worth my strife, but because I have said my say and I am well pleased to let others occupy my small place in the world of letters. I have done what I wanted to do and now silence becomes me. I am told that in these days you are quickly forgotten if you do not by some new work keep your name before the public, and I have little doubt that it is true. Well, I am

prepared for that. When my obituary notice at last appears in *The Times,* and they say: "What, I thought he died years ago," my ghost will gently chuckle.[23]

と述べ、成すべきことは全て成し遂げ、今は来し方人生を静かに回顧し、いかなることでも莞爾として受け容れる心境に達したと老成した心情のほどを吐露している。

だが、『人間の絆』を書き上げ、過去の心の傷や達成できなかった理想等々の想いから自由になる筈だったモームは、一時的に彼の思念を占有していた心の中の種々の憑きものを取り払い、一応の自由を得たものの、長い人生でうっ積していた過去の傷痕や果たせなかったものに対する悔恨の情はそう簡単に消えたわけではなかった。特に幼少時の母親喪失、吃音の苦しみ、牧師館での冷遇、キングズスクールで受けた悔蔑感等々といった不幸の影響は時の経過と共に減少はしたものの根だやしになったわけではなかった。その影響は再びまいもどってきた老後のモームにつきまとうようになった。『サミング・アップ』での《Her death was a wound that fifty years have not entirely healed.》(p.203) という母親を恋うる気持ちと、その喪失感が変わらざる悲しみとなって胸中を去来することや、吃音や短軀醜面に対する劣等感等に対する悩み等々が終生モームにつきまとうことになった。モームは、次にみるごとく、老後には、己れの人生を振り返えり、悔恨の情にさいなまれるようであった。《おれの一生は失敗だった。……一生おれはあやまちばかり犯して来た。みじめな生涯だ。何もかもめちゃめちゃにしてしまった。……おれはとんでもない阿保だった……，それに恐ろしいのは、おれがもう一度はじめから生涯をやり直すとしても、おそらくまったく同じまちがいをしでかすだろうということだ。……おれの最大のまちがいはこうだ。おれという人間は四分の三は正常(ノーマル)で、四分の一だけがおかしいのだと、自分で自分に説得しようと努めてきたんだが——実際はその逆だったんだ。……おれはほんとにだめな人間だと思う。完璧にだめな人間だ。……だがほかのことは全部おくとしても、秘密探偵としてのおれに、おれの吃りがどんなに不都合をきたしたか、お前には想像もつかんよ。……みんな、ただおれを見せものにしたいだけなんだ。……おれは何ともいいようのない悪い人間だった……かりにもおれをよく知ってくれた小数の人たちは、一人残らず最後におれを憎むようになってしまった……イエス・キリストなら、おれが生涯に格闘の相手とせねばならなかったすべての苦悩を、何とか処理できたろう……ああ、おれはこの上なくみじめだ……なぜみんなは、おれをそーっと死なせてはくれないんだ？》[24]（これらは『モームと私生活』の〈ウィリーの晩年〉から抽出したものだが、一連の表現をなしているわけではない。）そういうモームに対し、甥のロビン・モームは《年をとればとるほど、生涯のいろいろな失敗をふり返って感ずる悲しみの度もました。が失われた機会への悔恨はウィリーの専売ではない。人生の現実はいかなる場合にも、若き日の夢のように甘美ではないのだ。われわれはだれしも、正直な人間であるかぎりでは、はじめのころの無垢な野心にくらべ、なしとげえたものがいかに安ものでしかないかを知っている。これは人間共通の悲劇なのだ。》[25]と、モームも例外的な人間ではなかったとし、老醜

の身に潜む屈辱感、敗北感、虚無感等々を一般化してみているのである。このようなモーム晩年の異常な言動に、高見幸郎氏は、人間らしい老残性を見い出し、《……かりにそれが真実だったとしても、それによってただちにこれまでの作家モームが全く虚像であったとするのは早計であろう。モームの肩を持つわけではないが、人間誰しも、緊張の生活をつづけた末に90歳ともなれば、多かれ少なかれぼけてくるし、辛抱がきかず気まぐれになるものである。そのように考えるならば、ロビン・モームが証言するモーム老残の姿は、けっして彼の不名誉になることではなく、むしろ彼が、いたって人間らしく一生を終ったということを示すものであろう。》[26]と、人間の行きつく末に一般的なあたたかい目を向けている。モームは心の中の憑きものから懸命に逃れようとするが、生涯それから脱れることはできなかった。だから、その生涯は〝憑きものへの隷属としての生涯〟であったともいえよう。だが、そうだからといって、晩年になって心の中の憑き物に苦しめられ、老耄に陥ったことを無残な老狂の果てと考えるのは不当であろう。彼の第三者的な超然たる姿勢、醒めた事物の観察眼、冷静な合理性、おだやかな気質等々が支配的に強かった彼の人生の最盛期にモームの人間像を求めるべきであり、その人となりを見てとるべきであろう。人間は人間をがんじがらめにしている情念を、種々の事柄を契機として消却するとはいっても、それは一時的な心の安らぎにつながるものでしかなく、永続していく力をもちえないものであろう。人間とは、所詮、人間の絆から脱却することは生涯できないものである。人間の理念と人間の在り方を人間の性格研究に託して模索したモーム文学のテーマは、結局、人間は自由と隷属の複合構造のもとでしか生を営むことはできないということを雄弁に物語るものであり、そしてモームは自らの老醜をさらけ出す中で、そのことを証言しているとも考えられよう。

自己解放は、無我の境地に徹することによってしか達成できない。世俗的な私心を去ったときにこそ真の魂の自由は得られるとモームは強調する。つまり、超己をなし、世俗的な諸々の現象に超然としうる人間のみが自己解放を達成することができるわけだ。『人間の絆』のフィリップ、『月と六ペンス』のストリックランド、『剃刀の刃』のラリー等々に象徴されるようにである。

『人間の絆』で展開される情念からの脱却作業は対人関係において試みられるが、次の長篇『月と六ペンス』で、主人公の情念解消の対象となるのは芸術である。この作品では主人公の絶対美の探求がその主題となる。諸々の世俗的心理的葛藤を克服し、ストリックランドは絶対美を創造し、その瞬間に一切の内面的な憑き物（美の創造欲）から解き放され、彼の魂は終の自由を手にする。ストリックランドの生の軌跡は一徹した美の追求に終始するが、創造本能に全生命が支配されている彼にとっては、絵が売れるとか売れないとか、認められるとか認められないとかは全く問題ではない。己れを空しくして世俗との係りを全て断ち、一意専心目標に向って歩み、作品と己れを同一化することに究極の歓喜の情、すなわち、自己解放を求める姿は文字通り求道者のそれである。道のために道を求めるというストリックランドの姿には求道者としてのしたたかな精神が宿っているといえよう。

平凡な一市井人として幸福に暮らしていた無趣味の株式仲買人ストリックランドは、ある日突然、何の予告もなしに妻子をすて、家をすてて出奔する。美の創造欲にとりつかれていたのである。そして、世話になった友人の妻を奪い、性欲のはけ口として利用し、あげくのはては彼女を死地へ赴かせる。この異常な行動は《理想芸術の創造にとりつかれた狂気の如き情念のなせる業》[27]と解釈されるが、ストリックランドは絶対美を創造するという情念の虜となっていたがゆえに、そういう狂気の行動をとり続け、究極においては絶対美としての芸術品の完成の中に自己解放を達成し、精神の安らぎを覚える。このようにして、全てを棄て、非情になりきって絶対美実現のために自己を追求する様は壮絶であり、超俗に生きる人間の姿をいやがうえにも厳粛なものにするのである。道のために道を求めるという厳烈なる求道者の生き方を体現しているのがストリックランドだが、このモチーフは、やがて『剃刀の刃』で文字通りの〝求道〟となって、その主人公に継承されるのである。

『月と六ペンス』では世界の究極の本体は何かと問う中で、やがて美は絶体だという思想がテーマとして追求される。この作品ではモームが礼讃してやまない無私の善意さえも美に従属するものとして考えられている。即ち、真や善をこえた絶対美が主になるわけである。モームは主人公ストリックランドの生の軌跡を追いながら、美は

The work of art, I decided, was the crowning product of human activity, and the final justification for all the misery, the endless toil, and the frustrated strivings of humanity. So that Michelangelo might paint certain figures on the ceiling of the Sistine Chapel, so that Shakespeare might write certain speeches and Keats his odes, it seemed to me worth while that untold millions should have lived and suffered and died. And though I modified this extravagance later by including the beautiful life among the works of art that alone gave a meaning to life, it was still beauty that I valued[28].

と考え、人間の生に伴う種々の因果論的現象を全て正当化するのは美そのものであると考える。これは美絶対の思想である。だが、やがて、彼は美に対する人間の判断は不確かなもので、それは、時代性が加味されなければならないという意味で、相対的なものでしかなく、美は絶対だとする思想は無益なものであるとし、美は単に美しいから美ではなく、それを根源的に規定づけるものがあってはじめて美は真なるものとして成り立つのだと考え、モームは次のように述べる。

The value of art, like the value of the Mystic Way, lies in its effects. If it can only give pleasure, however spiritual that pleasure may be, it is of no great consequence, or at least of no more consequence than a dozen oysters and a pint of Montrachet. If it is a solace, that is well enough; the world is full of inevitable evils and it is good that man should

have some hermitage to which from time to time he may withdraw himself; but not to escape them, rather to gather fresh strength to face them. For art, if it is to be reckoned as one of the great values of life, must teach men humility, tolerance, wisdom, and magnanimity. The value of art is not beauty, but right action.……Its only importance is that it should give us here and now the aesthetic thrill and that this aesthetic thrill should move us to works. If it is to be anything more than a self-indulgence and an occasion for selfcomplacency, it must strengthen your character and make it more fitted for right action.[29]

モームの美はその根源的な資質において善を伴うものでなければならないとする。それは何故かというと、美を追求する過程でダーク・ストルーヴにみられるように人間の善意が踏みにじられ、顧みられないからである。善というのは一種の力であり、事物の推進力となるものである。事実、前記のストルーヴやアタにみられるような人間の善意があったからこそ、ストリックランドの畢生の名画が生まれるのであり、最高の美を実現させるために善意のつみ重ねが大きな滋養分となっているのである。美に対するモームの考え方は、『サミング・アップ』で《there is no permanence in the judgement of beauty.》(p.196)と述べるように、流動を重ね、かなりの変容を遂げてきているが、究極的には美は善と結びついて実践的な行動美学となるときに絶対的な意味をもつようになると判断している。『月と六ペンス』の思想的テーマは、《宇宙の核心としての美の霊であり、それは自然の深淵にひそむ、官能的で淫猥でさえある生命そのもの、神秘原始の美の魔である。そしてこのテーマは、ストリックランドの遍歴によって表現されている。芸術家はすべてを犠牲にしても美の霊を表現せねばならぬ使命を帯びており、ストリックランドはその使徒である。》[30]と、相良氏が論じるように、魔性とも称すべき美の絶対性を高揚するところにあるが、前にみたように、モームの思念の中には善が次第に力を増し、善こそは神や宇宙の根源であるべきで、美はそれを伴ってこそ絶対となると考える。美の内質を決定するのは善であり、善の有機的実践過程の中にこそ美の絶対性は顕現されるというわけである。

一作家の文学作品の中で思想的転換がみられるのは、現実の世界は、特定の時空によって条件づけられた特定の思想では裁断できないからである。時や所の移り変わりという二次元的世界の変容によって人間の思考の様式は異なったものとなり、また、同一人物の視眼を通すとはいっても、物をみる角度によって人間のもつ思念はその相貌を変える。このように変容を重ねてやまない人間の思考は登場人物たちの性格に投与され、華竟、作品の思想性は時空相応に変貌を遂げるのが常である。モームは常に懐疑的であり、その視点は流動的であり、『ラムベスのライザ』の底流をなす自然主義的発想、『人間の絆』にみられる浪漫主義と写実主義の複合的発想、『剃刀の刃』にみられる写実主義的な発想等々にみられるように、一つのイズムに固定されることなく、時代思潮を適度に斟酌しながらも、時代性をこえて存在する

〝人間の本性とは何か〟を変らざるテーマとし、それについて思念を凝らし、人生とそれに生きる人間の本性について模索を続けてやまない作家であった。

『月と六ペンス』における〝宇宙のリアリティは即ち美である〟とするテーマに関し、相良氏は《真実については、この作品では、宇宙の窮極の実在の様相として捉えられ、真実＝美という等式が成立する。宇宙のリアリティは美であるという哲学を、風景と芸術と絵画を通じ、言葉によって、これほど体系的且つ具体的に表現し得た小説は、類を見出し難いであろう。》[31]と論述する。この宇宙のリアリティは即ち美であるとする絶対美を求める魂の遍歴は美の体現と共に終焉を告げ、その瞬間に狂気にも似た美の使徒としての業から解放され、安心立命の境地を得るのが主人公ストリックランドである。だが、このようなモームの絶対美の思想はやがて善を必要不可欠の要素とする美善合一の境地こそ最高の美だとする思想に転換され、その過程を論及するのが『剃刀の刃』である。

『剃刀の刃』試論（魂の自由を求めるラリーの遍歴）

これまで触れてきたモームの主要作品の主人公たちは、世事一般との係り合いを避けるという現害逃避型の自己探求者が多い。既成の価値観を人間の自由を拘束する最大の呪縛とし、それが不動なるものとして幅を利かす閉ざされた伝統世界から脱出し、新しい価値を発見する努力を重ね、その過程で掌握される新次元の世界に入ることによって解脱をえ、自己脱皮をはかるのである。これまで概観してきた『人間の絆』、『月と六ペンス』、それにこれから詳しく分析していく『剃刀の刃』等の主人公たちにみられるように、精神の自由を求めて、様々な地に赴き、色々な経験をする過程から人生や芸術を学び、その学びの中から自己解放の手段を手にして、安心立命の境地を得るという形式をとる。勿論、この境地に達する方策にはフィリップは人間を、ストリックランドは芸術を、ラリーは宗教を選ぶという方法論的な違いはあるが、この三つの作品におけるモチーフの展開の仕方はほぼ似通っているといえる。

『剃刀の刃』（1944年）は人生の老成期にあたるモーム70歳の時の作品であり、その評価も“the crawning triumph”(Time, April 24, 1944)とか“unbelievably cheap and trifling” (H.L. Binsse, Commonweal, (April 28, 1944)[32] とかに代表されるように賛否両論にわかれる。だが、出版後15年以上経っても著者に読後感を寄せ、自由奔放に行動する主人公についていろいろと問い合わせてくる熱心な読者が後を断たないほどこの作品に対する人気は高く、売れ行きも500万部をこえ、モーム全著作中のベストセラーとして不動なる地位を誇るものとなった。特に、この作品に共感を覚える読者の中心をなすのは兵士たちであったという。戦場という死と直面する極限状況下で、人生への懐疑を覚えた兵士たちの魂をゆさぶるものが、この作品にはあったからである。出版されたのは1944年、第二次世界大戦真最中で、米国人を主要登場人物としたこともあってか、米国の青年たちの間で驚異的な反響をよぶ結果となった。兵士たちが、戦争という運命共同体的な条件下で、生と死、善と悪、神と無限性等々の

問題に深く心を動かされたであろうことは容易に想像できることである。第二次世界大戦、朝鮮戦争、ヴェトナム戦争等々を経て醸成された反戦思想、人生の成功の目安を物的基盤におく物質万能主義的風潮に対する反発心、生きるうえでの指針となるような信仰を求める戦後の人々の心情等々に適合するものとして、この作品は実に時代的な誼を得ていたのである。コールダーは批評家エドワード・ウィークスの《……、信仰に対するひろくひろまっている新しい欲求を感知した点で、モーム氏は正しい》を引き合いに出しながら、《宗教的主題に対する関心の波は、第二次大戦にたいする自然の反応として、たかまっていた。苦闘、苦痛、死の累積した影響の結果として、逃避としても、希望の手段としても、人びとはしだいに精神的な事柄に関心を寄せるようになった。》[33]と述べ、宗教的な小説『天国の鍵』(*A.* クローニン)、『バーナデッドの歌』(フランツ・ヴェルフェル)、『法衣』(ロイド・ダグラス) 等々を1940年代のベストセラーとしてあげている。このような時代性に合致する作品が即ち『剃刀の刃』であったのである。この時代思潮をよみとる鋭敏なモームの眼識について、コールダーは、また、《モームの経歴のもっとも驚嘆に値する面の一つは、彼ほど成功をおさめて時代とともに動くことができた作家がどんな時にもほとんどいない事実である。……、彼がほとんどいつも時代錯誤のふうを絶対にもっていないことだった。彼の処女作ー『サムベスのライザ』(1897年)ーが世紀のまがり角の文学的潮流を反映していたように、40年以上も後の『かみそりの刃』(1944年)はその時代の精神をとらえていた。時代性を維持しつづけるこの注目すべき能力をもっていた理由は、モームが一生をささげた職業意識にある。》[34]と述べている。ところが、モームの作品を読んでいると、次のリチャード・コーデルの言葉にみられるように、判断の規準が示されない場合が多いせいか、ふと困惑を感じる場合があることも事実である。

The Razor's Edge, like *Of Human Bondage,* answers few or no questions, but leads the reader to ask himself questions about good and evil, justice and injustice, fact and superstition, the good life and the wasted life.[35]

モームは読者を巧みに作品の世界に導入はするが、そこに展開される内容に関する価値判断は示さない。彼は読者を突き放すのである。彼は自分の描く世界について意見は述べるが、その世界を成立させている種々の要件についての分類とか整理とかは殆どおこなわないし、是非の判決としての価値判断を下すことはしないのである。彼は終始超然として傍観者的姿勢を保ち、問題を解決する事件の当事者とはならないのである。これは客観的放置主義、あるいは臨床主義が彼の創作態度に織り込まれていることを示すものである。それは若い頃の医学修業で得た科学的思考様式に因るものであり、また、各国を旅行し、行く先々の社会的行動上の規範性、風俗習慣、道徳等々に通暁した成果として身につけた傍観者的な超然たる態度に由来するものでもある。モームのこのようないわゆる〈判決の拒否〉の理由について

ジョン・ブロウフィは《……人間の経験はあまりにも多様であるから、多少とも普遍的な結論めいたものを引き出すことはできぬ、ということらしい。経験のあとに残るのはただ個々の事実の感銘の深さだけであり、そういう事実が職業作家モームに物語りの才能を駆使する材料を提供する。統一ある信条をつくり上げることのできるのは、自国に閉じこもって、もっぱら自分の鎖国的な哲学体系に都合のよい事実だけを見ている人にかぎるのである。さまざまな経験をつめば、しぜん一切の価値に懐疑をいだくようになる。[36]》と論ずる。だが、これまで概観してきたことがモームの基本的な創作態度であるとしても、彼は

I suppose if I belonged to the modern school of story writers, I should write it just as it is and leave it. It goes against the grain with me. I want a story to have form, and I don't see how you can give it that unless you can bring it to a conclusion that leaves no legitimate room for questioning. But even if you could bring yourself to leave the reader up in the air you don't want to leave yourself up in the air with him.[37]

と、読者を突き放すことには抵抗を示している。だが、彼の作品には、その結論はともかくとして、それにいたる過程においていわゆる判決を拒否する姿勢が随所に見られることは周知の事実である。それは《A good rule for writers: do not explain overmuch.[38]》の考えに基づいているのである。このようにみてくると、何が建前なのか、何が本音なのか、我々は判断に苦しむばかりである。判決を拒否する気持ちと、判決を示してやりたい気持ちが重なり合い、モームはここでも一種の自家撞着におちいっているのである。いずれにせよ、『剃刀の刃』はモームが70歳を迎えた時のものであり、長篇小説も処女作『ランベスのライザ』(1897年)から『カタリーナ』(1948年)までの20篇にわたり、『剃刀の刃』(1944年)はその18番目の作品であり、年齢、文筆経歴からいっても円熟の域に達した時のものであり、それだけに内容的にも豊潤なものがあり、野心作といっても差し支えはあるまい。

この作品はモームが常に追求してやまなかった精神の自由をテーマとする。即ち、モームの心の中に常々巣くっていて、仲々離れようとしない重苦しい憑きものから自己解放を試みるというテーマが臨床的に展開されるのである。主人公ローレンス・ダレル(通称ラリー)は、求道者として諸国を遍歴しながら魂の解放を求め、生・死・神・無限・善・悪等々の問題と取り組む。この作品に対する評価はどうであれ、モチーフの展開の仕方は迫力に富む。芸術家というよりも科学者によくある感情に動かされない意識的かつ冷静な観察眼をもった主人公ラリーの人生態度にはモームの創作態度の背後にある臨床主義的感覚が潜んでいるといえよう。そういうモームの作家としての感覚について、前にもすこし触れたが、ブロウフィは《この臨床家的態度を、単にモームの医学修業の副産物にすぎぬと考えるべきではない。それはほぼ間違いなく、天性的なもので、彼が持って生れ、フランス文学における「客観」派、特にモーパッサンはフローベル(Gustave Flaubert, 1821-80)の文学上の門下、いや実際

の弟子だったのである。臨床主義は、ときおりモームがある程度あからさまに述べている、宗教や哲学上の意見と密接な関連を持っていて、それは、ふつう便宜上コスモポリタン的と呼ばれる生活習慣によって生み出されないまでも、育てられることの多い見解である。自他ともに許すコスモポリタンとなるためには、各地を旅行して歩くだけでは足りない。すなわち、その遍歴はいくつかの基地から行われなければならず、その基地は大きな首都であることを要し、巡歴する人はその首都のもっとも有力な社会と親密な間柄でなければならぬ。モームはこの条件を満たしているように見える。イギリス人を両親にして生れ、カンタベリーの学校で教育を受けた彼は、ハイデルベルヒ大学に学んだ後、ロンドンで医業に従事した。それ以来、彼の旅行はひんぱん且つ広範囲にわたり、インド、ビルマ、シャム、マレー、中国、南洋、ロシヤ、南北両アメリカに行っている——しかし彼が家庭をかまえたのはロンドン、パリー、ニューヨークと、この三つの首都の或る季節における別館ともいうべきフランス領リヴィエラであった。[39]》と論ずる。このようにモームの臨床主義的創作態度は、医学修業時代に培われた客観性を重視する科学的態度、フランス文学の客観派モーパッサンから受けた影響、コスモポリタン的生活習慣等々によって育成されたものである。

モームは『剃刀の刃』の冒頭で、《I have neer begun a novel with more misgiving.[40]》と述べ、主要登場人物の取り扱いに疑懼の念を表明している。著者と国籍が違うゆえに アメリカ人をどのていど描けるかと危惧の念をいだくわけである。モームは

Another reason that has caused me to embark upon this work with apprehension is that the persons I have chiefly to deal with are American. It is very difficult to know people and I don't think one can ever really know any but one's own countrymen. For men and women are not only themselves; they are also the region in which they were born, the city apartment or the farm in which they learnt to walk, the games they played as children, the old wives' tales they overheard, the food they ate, the schools they attended, the sports they followed, the poets they read, and the God they believed in. It is all these things that have made them what they are, and these are the things that you can't come to know by hearsay, you can only know them if you have lived them. You can only know them if you are them. And because you cannot know persons of a nation foreign to you except from observation, it is difficult to give them credibility in the pages of a book. Even so subtle and careful an observer as Henry James, though he lived in England for forty years, never managed to create an Englishman who was through and through English.[41]

と述べ、アメリカ人を描きはするが、その理解度には自ら限界があるとしている。この作品に登場する一人称の語り手〈モーム氏〉は意識的にあくまでもイギリス人である。感情に動

かされることのない冷静な超然たる第三者としてのイギリス人の設定は、この小説に客観性をもたせるためのものであり、事実、この作品を臨床的なものにしているのである。

『剃刀の刃』という表題の由来は巻頭に掲げる《The sharp edge of a razor is difficult to pass over; thus the wise say the path to salvation is hard.》[42] (KATA-UPANISHAD)にある。これは主人公ラリーが人間の悩み、迷いを解決するために諸国を遍歴して苦労することを表象し、傷ついた魂が済度を求めて苦渋し、彷徨する過程を象徴するものである。文字通り、主人公は鋭い剃刀の刃をこえて行くように、諸々の困難を克服し、究極において悟りの境地に到達し、心の安らぎを覚え、自己解放を達成し、念願を就就するのである。その苦節十年の過程を描いたのがこの作品である。

『人間の絆』では生の営みに係る霊的なものと合理的なもの、『月と六ペンス』では絶対美に係るイエス的なものとユダ的なものとの争いが描かれるが、『剃刀の刃』では人間の生き方に関する霊的なものと唯物的なものとの争いが描かれている。この作品に対する評価は、前にも触れたように、賛否両論あるとはいっても、それがモーム後期を代表する最も野心的な作品であるという点については先ず異論はあるまい。この作品の原型をなすのは、立身出世至上主義を標榜するアメリカの伝統的閉鎖社会にみられる唯物主義と、そういう社会からの脱出を試み、新しい価値を見い出し、そこに安心立命の境地を得るという唯心主義との相剋状況を描く『エドワード・バーナードの没落』(1921年) である。実業生活、社交的生活、美女との結婚を排棄するエドワード・バーナードの変形がラリー、女性主人公は同名のままのイザベル、因襲的で社交的である青年のベイトマン・ハンターの変身はグレイ・マチュリンとして登場するが、《この短篇に於いて、原型的に示された善悪の問題、人間の救いの問題は「剃刀の刃」では、正面から取り扱われる……。》[43]のである。コールダーは個人的精神の自由を求めるというテーマを発展させているモームの短篇には『メイヒュー』(1923年)、『生計を営むもの』、『のぼり坂』(1924年—未発表)、『人間の本質』(1930年)、『安逸をむさぼるもの』(1935年) 等々があるが、その中でも特に『剃刀の刃』と緊密な相似性をもったものは『のぼり坂』であると指摘し、そのことについて《モームはこれを1924年ごろに書き、だれもそれに関心を示さなかったので、目につくその本すべてを破りすててしまった。『スティーヴン・ケアリーの芸術的気質』が何年も後に『人間の絆』として復活したように、この資料は眠ったままで放置され、はるかにもっと芸術的な形態をととのえて、ながい歳月をへた後に、みごとな実りを見ることになった。》[44]と論ずるように、『剃刀の刃』のモチーフは『エドワード・バーナードの没落』—『のぼり坂』—『剃刀の刃』としての連動的継承性をもち、それは20有余年にわたってモームが心の中であたため続けてきたものである。

モームは

This book consists of my recollections of a man with whom I was thrown into close contact only at long intervals, and I have little knowledge of what happened to him in

between[45].

と、『剃刀の刃』の登場人物に抽象的に触れ、次に

I have invented nothing. To save embarrassment to people still living I have given to the persons who play a part in this story names of my own contriving, and I have in other ways taken pains to make sure that no one should recognize them. The man I am writing about is not famous. It may be that he never will be. It may be that when his life at last comes to an end he will leave no more trace of his sojourn on earth than a stone thrown into a river leaves on the surface of the water. Then my book, if it is read at all, will be read only for what intrinsic interest it may possess. But it may be that the way of life that he has chosen for himself and the peculiar strength and sweetness of his character may have an ever-growing influence over his fellow men so that, long after his death perhaps, it may be realized that there lived in this age a very remarkable creature[46].

と、主人公のモデルが非凡なる凡人であることを明言している。このモデルに関し、越川正三氏は《……、随筆で語られている大尊者マハルシ(Maharsh)の生涯が小説の主人公ラリーのそれと著しく似ているということ、もっとはっきりいえば、モームが大尊者をモデルにしてラリーを創りだしたフシがみえる……。》[47]と推論している。ちなみにこの大尊者とは、モームが1938年に印度旅行をした際に会ったヒンズー教の聖者のことであり、彼はモーム84歳の時に上梓した随筆集『作家の立場から』の一篇「聖人」に登場する人物である。なお、この印度旅行の印象記は、『作家の手帖』の「1938年」で、C少佐（イギリスに身寄りがなく、あっちこっちを旅行した後インドこそ安住の地であり、ヨーギの存在と、その姿を仰ぐことが何物にもまして精神的な安らぎを与えてくれるもので、庵室で暮らし、自分が悟りを開くか、自分の崇拝してやまないヨーギが死ぬまで彼地にとどまりたいと考える。自分の過去については口を閉ざしたままである。このC少佐の描写はラリーそのものである。ラリーの性格形成や魂の遍歴の旅の背景をつくるのに大いに役立っている。―「**特注**」参照)、ヨガ教徒の一日、スフィ教徒と坐禅、ある聖人、スワミ(ヨガ教の僧侶に対する敬称)、苦行僧たち、神秘術者、サンスクリット学者、タジマ・マハール、ヒンズー教の托鉢僧、マイソウル大瀧（大学で哲学を学んだ38歳の印度人アシュウォースが大瀧から落下す水と自己との一体感を通して〝万物は一つなり〟という哲理を得るが、この知覚は後日『剃刀の刃』の素材となり、主人公ラリーが空軍兵士時代に飛行中の宇宙の無限大さと自己との一体感、印度の山頂で悟りを開く際に感知する大自然と自己との一体感となって描写されている)、トラヴァンコールの入江、首相(デワン)の因果報応論と輪廻論、聖者ヨギ、マデュラ(夜の寺院)、印度の百姓等々として

記述され、その中で最も胸を打つ印象として残っているのは、おそろしく痩せた百姓たちが、日の出から日没まで働きづくめで、望めるのはただ辛うじて糊口をしのんで生きて行くという悲惨な姿であった、とモームは述懐している。この印度旅行記は『剃刀の刃』の大きな背景要素となるものであり、この作品を理解するために是非読まなければならない資料である。

越川氏は、また、『剃刀の刃』がヒンズー教の大尊者の伝記「聖人」に着想を得て、ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』を念頭において草稿されたものであると推測する。空しい虚栄を追い求めるという点で『剃刀の刃』のエリオットと『カラマゾフの兄弟』のフョードルは共通し、神聖な犠牲者としてのソフィーと妖婦性と神聖さを与えられたグルーシェンカとの共通性、悲劇の渦中にいる人物であるにも拘らず、悲劇性を感じさせない点で共通するイザベルとカチェリーナ、印度の大尊者をモデルにしたラリーとゾシマ僧正との共通性等々に着目し、モームは『カラマゾフの兄弟』を念頭において『剃刀の刃』を書いたのではないかと論じている。このように、『剃刀の刃』の背景には、これまで論じてきた三つの要素があることが考えられる。即ち、種々の短篇で繰り返えされ、あたためられてきた〈精神の自由〉という同一テーマ、印度旅行で蒐集した資料、ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』の登場人物たちへの関心等々が、『剃刀の刃』を執筆するにあたり、大きな背景要素として有効に機能化されているのである。

『作家の手帖』や『作家の立場から』の「聖人」の中で展開される回顧談の中に出てくるヨーギ(Yogi)とマハルシ・ヴェンカタラマ (Maharshi Venkatarama)は同一人物であり、彼等の言動が『剃刀の刃』の主人公ラリーに思念化されているという意味で彼等はまさにラリーそのものであるといえよう。また、ラリーのヒンズー教の導師であるシュリ・ガネシヤ(Shri Ganesha)もヨーギやマハルシと重なり合う。印度旅行で集めた資料が『剃刀の刃』や「聖人」の背景を形成するのに大いに役立っていることは、次の語りを単純に比較してみるだけでも、容易に首肯されるものである。

The Yogi sat on a low dais on a tiger skin and in front of him was a small brazier in which incense was burning. Its scent was agreeable to the nostrils. Now and again a disciple came forward and lit another stick. The faithful sat on the floor. Some were reading; others meditated. Presently two strangers came in with a basket of fruit, prostrated themselves before the Yogi and presented their offering. He accepted it with a slight inclination of the head and motioned to a disciple to take it away; he spoke kindly for a little to the strangers and then with another little inclination of the head signified to them that they were to withdraw. They prostrated themselves again and went and sat among the rest of the faithful. Then the Yogi became abstracted in meditation, a little shiver seemed to pass through all who were there, and I tiptoed out of the hall.[48] (『A Writer's Notebook』—下線部は引用者による)

We had brought a basket of fruit to present to him, as I was informed was the graceful custom.
——The Swami accepted it with a slight inclination of the head and motioned to a disciple to take it away.[49] (『作家の立場から』)

I found a young man at the entrance of the compound and asked him if I could see the Yogi. I'd brought with me the basket of fruit which is the customary gift to offer. In a few minutes the young man came back and led me into a long hall with windows all around it. In one corner Shri Ganesha sat in the attitude of meditation on a raised dais covered with a tiger skin. "I've been expecting you," he said. I was surprised, but supposed my friend of Madura had told him something about me. But he shook his head when I mentioned his name. I presented my fruit and he told the young man to take it away.[50] (『THE RAZOR'S EDGE』—下線部は引用者による)

ここに掲げた共通描写はほんの一例にすぎない。『作家の手帖』にみられる印度旅行記、即ち、坐禅、自我と宇宙の自我、神秘的な秘術者、ベナレスにおけるガンジス川の体験、宇宙と自我の一体感、輪廻論等々が『剃刀の刃』の第六章に素材として活用されていることは改めて指摘するまでもないことである。

なお、余談ではあるが、次にモームのモデル論を小々みておきたい。モームは彼の生涯に起こったことは何でも作品の中にいろいろの方法で使い、時には彼の体験が主題となり、それをうまく説明するために一連の事件を創作したこともあり、そういう事件に彼が知っている人々を、作中人物のモデルとして、活用してきたが、今、ふり返ってみるとどこまでが事実で、どこまでが虚構となっているのかその区別がつきかねるほどであると『サミング・アップ』で語っている。そして、実在の人間をモデルにして作中人物を描くことは作家たるものの常套手段であるとして次のように論ずる。

It is the universal custom. From the beginning of literature authors have had originals for their creations. …… Turgenev stated thet he could not create a character at all unless as a starting point he could fix his imagination on a living person. I suspect that the writers who deny that they use actual persons deceive themselves …… or deceive us. When they tell the truth and have in fact had no particular person in mind it will be found, I think, that they owe their characters rather to their memory than to their creative instinct. …… I should say that the practice of drawing characters from actual models is not only universal, but necessary. I do not see why any writer should be ashamed to acknowledge it. As Turgenev said, it is only if you have a definite

person in your mind that you can give vitality and idiosyncrasy to your own creation.

I insist that it is a creation. We know very little even of the persons we know most intimately; we do not know them enough to transfer them to the pages of a book and make human beings of them. People are too elusive, too shadowy, to be copied; and they are also too incoherent and contradictory. The writer does not copy his originals; he takes what he wants from them, a few traits that have caught his attention, a turn of mind that has fired his imagination, and therefrom constructs his character. He is not concerned whether it is a truthful likeness; he is concerned only to create a plausible harmony convenient for his own purposes. So different may be the finished product from the original that it must be a common experience of authors to be accused of having drawn a life-like portrait of a certain person when they had in mind someone quite different. Further, it is just chance whether the author chooses his models from persons with whom he is intimately connected or not. It is often enough for him to have caught a glimpse of someone in a tea-shop or chatted with him for a quarter of an hour in a ship's smoking-room. All he needs is that tiny, fertile substratum which he can then build up by means of his experience of life, his knowledge of human nature and his native intuition.[51]

これまで『剃刀の刃』の成立要件としての種々の背景を概観してきたが、以下、この作品の内容の展開に従って、主人公ラリーの精神行脚の旅路の跡を辿ってみよう。

この小説の舞台はアメリカのシカゴで始まる。時は第一次世界大戦が終結をみた翌年(1919年)である。物語りは、『月と六ペンス』(1919年)や『お菓子と麦酒』(1930年)にみられるように、イギリスの作家〈モーム氏〉が第一人称の〝I〟で語る形式をとる。主要登場人物は私(Mr. Maugham)、ローレンス・ダレル(通称ラリー)、イザベル・ブラッドレー、エリオット・テムプルトン、グレイ・マチューリン、ソフィー・マクドナルド、シュザンヌ・ルーヴィエ等々であり、ラリーの戦時体験、イザベルとの恋愛・婚約、その解消、ヨーロッパの社交生活、ラリーの自由を求める魂の遍歴等を基軸として、舞台はアメリカ、イギリス、フランス、スペイン、イタリア、ベルギー、ドイツ等々からインドにまで拡がって行く。実に広大無辺である。

モームの作品は極めて広い空間的な拡がりをみせるところに一つの特色がある。モームは生涯にわたって世界各国を旅行し、見聞を広め、体験を深め、その成果を作品に次々と投与した。その意味でも類稀な存在をなした作家である。『剃刀の刃』を執筆した起爆的要因になったのも1938年の印度旅行であったことは既にみてきた通りである。モームは

WHEN I recovered from my illness the war was over. I went to China. I went with the

feelings of any traveller interested in art and curious to see what he could of the manners of a strange people whose civilization was of great antiquity; but I went also with the notion that I must surely run across men of various sorts whose acquaintance would enlarge my experience. I did. I filled note-books with descriptions of places and persons and the stories they suggested. I became aware of the specific benefit I was capable of getting from travel; before, it had been only an instinctive feeling. This was freedom of the spirit on the one hand, and on the other, the collection of all manner of persons who might serve my purposes. After that I travelled to many countries. I journeyed over a dozen seas, in liners, in tramps, in schooners; I went by train, by car, by chair, on foot, or on horseback. I kept my eyes open for character, oddness, and personality. I learnt very quickly when a place promised me something and then I waited till I had got it. Otherwise I passed on. I accepted every experience that came way.[52]

と語るが、実際、人生体験を豊かなものにするために、南フランスのリベエラ（別荘）を基地として、ヨーロッパ諸国、アメリカ、ロシア、南海諸島、中国、日本等々世界各国を精力的に旅行している。彼にとっての旅行は作家としての生命を維持するための必須の行為であり、前に触れたように、彼は自然の美しさや行く先々の土地の風俗習慣などにはさして関心は示さず、前記の引用にあるごとく〈人間の収集〉が主眼になり、もっぱら人間の生き様に注目を払ってきたのである。ちなみに、彼が「サマセット・モーム文学賞」をつくった時には、賞獲得者がその賞金を旅行に使うことを一つの条件にしたほどであった。それほど旅行で得る資料を彼は重要視していたのである。

『剃刀の刃』は、今みたように、第一次世界大戦の末期を時代背景とし、空中戦で死の淵に追い込まれたラリーを、無二の戦友が自分の生命を犠牲にして、救出する場面が事実上のモチーフ展開の発端となる。

We were due for a spot of leave early in March, in 'eighteen that was, and we made our plans beforehand. There wasn't a thing we weren't going to do. The day before we were to go we were sent up to fly over the enemy lines and bring back reports of what we saw. Suddenly we came bang up against some German planes, and before we knew where we were we were in the middle of a dogfight. One of them came aftr me, but I got in first. I took a look to see if he was going to crash and then out of the corner of my eye I saw another plane on my tail. I dived to get away from him, but he was on to me like a flash and I thought I was done for; then I saw Patsy come down on him like a streak of lightning and give him all he'd got. They'd had enough and sheered off and we made for home. My machine had got pretty well knocked about and I only just made it. Patsy got

in before me. When I got out of my plane they'd just got him out of his. He was lying on the ground and they were waiting for the ambulance to come up. When he saw me he grinned.

"'I got that blighter who was on your tail," he said.

"'What's the matter, Patsy?" I asked.

"'Oh, it's nothing. He winged me."

'He was looking deathly white. Suddenly a strange look came over his face. It had just come to him that he was dying, and the possibility of death had never so much as crossed his mind. Before they could stop him he sat up and gave a laugh.

"'Well I'm jiggered,' he said.

'He fell back dead.[53]

軽口を叩きながら、ラリーの目前で、息を引きとった戦友パッツイは、故国に婚約者を残す22歳のアイルランド兵であった。この悪夢のように瞬時にして訪れた生と死の極限状況を体験したラリーは戦友の死に深刻な衝激を受けた。それ以来、ラリーは世俗的世界に背を向けて、人間のもつ宿命としての生と死、善と悪、正と不正、神とその救い、滅びを知らない永遠無窮性等々について深刻に考えるようになったのである。このようにして人生の謎にとりつかれたラリーはその解答を求めるのに心の休まる暇はなかった。蛇足かも知れないが、《……ラリーの苦悩はあまりに観念的である。その〝放浪〟の動機について、作者は戦場での異常な体験に簡単に触れるだけだが、戦友の死がいかにショックだったとはいえ、それだけで主人公がいっさいの世俗的幸福を捨て求道の旅に走り、果ては金は〝第六感〟ではなく〝束縛〟とばかり、亡父の遺産さえ始末するという道程は決して説得力があるとはいえない。》[59]のように〝戦友の死〟が 作品全体を支えるには 動機的に不十分だとする向きもあるが、それは一般化した場合のことであって、特殊な性格をもつ人間にとって絶対的な意味をもつ〝死〟と直面する情況は物語り発端の素材として十分であろう。というのは、一人の身近かな人間の生命喪失という決定的瞬間は、生き残ったものに、生とは、死とは、運命とは、神とは等々に関する深遠且つ深刻な想念の展開を否応なくもたらすからである。ラリーは

'I don't think I shall ever find peace till I make up my mind about things,' he said gravely. He hesitated. 'It's very difficult to put into words. The moment you try to you feel embarrassed. You say to yourself: "Who am I that I should bother my head about this, that, and the other? Perhaps it's only because I'm a conceited prig. Wouldn't it be better to follow the beaten track and let what's coming to you come?" And then you think of a fellow who an hour before was full of life and fun, and he's lying dead; it's all so cruel

and so meaningless. It's hard not to ask yourself what life is all about and whether there's any sense to it or whether it's all a tragic blunder of blind fate.'[55]

と悩み、魂の解放を求めて諸国行脚の旅に出た。

ラリーが自己の解放を求め、人生の真実を求めて歩む路程は、レイノード・クラークに従えば、四つの段階に区分される。フランス（パリ）に行き、2年ほど書籍の世界で人生の意味を探求するが、読書一辺倒では満足の行く解答が得られず、行動を通して求めるものに接近することを感じ、北仏の炭鉱で抗夫になるが、そこで会ったポーランド人の貴族の将軍の子で、将校あがりのコスティに触発され、キリスト教神秘主義に関心をもつ（第一段階）。ドイツ（ボン）でキリスト教の世界に入る。約3ヶ月ほどベネディクト派の修道院生活を送るが、心の満足を得ることができない(第二段階)。スペインで芸術を通して真理への到達を試みるが、意に適わざるを感じる（第三段階)。インド（ボンベイ）でラーマ・クリシュナ導師に会い、ヒンズー教を学び、壮大な輪廻の思想を知る。バラモン教のシュリ・ガネシヤの導きによって究極的な啓発(enligtenment)を得る。即ち、ラリーは〝山頂の悟り〟（絶対者との同一化）を通して心の平安を得る（第四段階)。この最後の段階はラリーの精神行脚の旅程に終止符を打つことを意味し、『剃刀の刃』のクライマックスになるものである。次に、各段階に順じて、旅程の内容を詳しく検討してみたい。

語り手のモーム氏は《'It may be that in one of the blind alleys I may find something to my purpose.' 'What is your purpose?' He hesitated a moment. 'That's just it. I don't quite know it yet.'[57]》とラリーと語るくだりに、この青年の心の中に形にならない潜在的な目的意識が宿っていることをみてとるが、それを《……, I had what I can only call an intuition that there was in the soul of that boy some confused striving, whether of half-thought out ideas or of dimly felt emotions I could not tell, which filled him with a restlessness that urged him he did not know whither.[58]》と解釈し、ラリーの心の中に不透明ながらも秘かに未知のものを求める作業がすでに始まっている事実をみる。この対話はラリーがすでに真実を求める魂の遍歴の旅に実質的に出ていることを示すものである。なお、モーム氏は後続する同じ章でイザベルと語るところで、ラリーの目的とすることに関して、

'It doesn't surprise me that you don't understand Larry,' I said, 'because I'm pretty sure he doesn't understand himself. If he's reticent about his aims it may be that it's because they're obscure to him. Mind you, I hardly know him and this is only guesswork: isn't it possible that he's looking for something, but what it is he doesn't know, and perhaps he isn't even sure it's there? Perhaps whatever it is that happened to him during the war has left him with a restlessness that won't let him be. Don't you think he may be pursuing an ideal that is hidden in a cloud of unknowing—like an astronomer looking

for a star that only a mathematical calculation tells him exists?'

'I feel that something's troubling him.'

'His soul? It may be that he's a little frightened of himself. It may be that he has no confidence in the authenticity of the vision that he dimly perceives in his mind's eye.'[59]

と、戦争体験に触発されて、焦燥感を覚えながら、未知なるものを探求しようとするラリーの心境をやや詳しく説明している。未知の雲の奥に隠れた理想のようなものを追う心の中に一つの憑き物(restlessness)として感じられる不透明で、深刻なものは、既に触れたように、無二の親友の自己犠牲（死）によって自分の生命が救われた事実から生まれてくる生き残った人間としての煩悩そのものであったのである。

壮絶な空中戦、そして冷酷な運命の裁断の結果として目前に横たわる戦友の屍をみて、ラリーは《The dead looks so terribly dead when they're dead.》[60]と表現し、死者の姿はあくまでも死者であり、寸秒前の生者としての気色はどこにも残さないものであると慨嘆し、傷心をなおいっそう深めるのである。人間の生とはこのように儚いものであり、空しくて捉えどころがなく、無常きわまりないものである。人間の尊厳さを象徴する生命を活殺自在に操るのは運命の糸であり、その背後には善悪を問うことなく非情になりきって運命の糸を操作する絶対者の存在があり、それは一体何なのであろうか、とラリーは問い続けていく。この戦友の死に接したラリーの心の中を通して、モームは『人間の絆』で展開した人生論、即ち、人生とは無意味なものだ、それは運命を操る絶対者によってがんじがらめにされ、人間の脆弱な意志の力ではどうすることもできないもので、人間の存在は、所詮、天の定めに則ったものであり、その範疇内でしか人間は人生模様を織り続けることができないという決定論的なテーマを再び展開している。この機械的決定論はモームの処女作『ラムベスのライザ』の背景論理をなすものであり、それはモームが64歳の時に、『人間の絆』で展開した人生観や世界観を改めて総括する形で出した『サミング・アップ』（注18参照）にみられる論理でもある。モームは、医学生時代に、人間は一個の生物として自然法則の支配下を脱け出すことはできない存在であると観じた。そういう基本的な人生観が一種の袋小路となり、彼の成長路線を閉ざしてしまい、彼の作家としての感覚を停頓たるものにした。このことはモームの成長の限界を示すものであるとし、上田敏は《モームの人生態度に、思いあがって高を括った図々しさが感じられ、運命と戦うという真に悲劇的なものが皆無であるのも、こういうところにその原因があるかと思う。そこに彼の物足りなさがあり、遂に大作家たるに値しない点もあるのだ。》[61]と論断している。

ラリーは

'Let's be sensible. A man must work, Larry. It's a matter of self-respect. This is a young country, and it's a man's duty to take part in its activities. Henry Maturin was saying

only the other day that we were beginning an era that would make the achievements of the past look like two bits. He said he could see no limit to our progress and he's convinced that by 1930 we shall be the richest and greatest country in the world. Don't you think that's terribly exciting?'

'Terribly.'

'There's never been such a chance for a young man. I should have thought you'd be proud to take part in the work that lies before us. It's such a wonderful adventure[62].'

と、懸命にアメリカ流の月並みな常識としての物質感覚を似って説得してかかる婚約者イザベルを残して、二年間の約束で、パリに赴いた。イザベルはこのように常識的な意味での物質万能主義的観点に立って

Isabel had been broutght up in a certain way and she accepted the princples that had been instilled into her. She did not think of money, because she had never known what it was not to have all she needed, but she was instinctively aware of its importance. It meant power, influence, and social consequence. It was the natural and obvious thing that a man should earn it. That was his plain life's work[63].

と、力も権勢も社会的地位も身分も全ては金次第でどうにでもなると考えるわけである。アメリカは無尽蔵な富をもつ巨大な国力と権力に支えられた国家となり、その物質的成長は並外れたものとなり、そういう新世界は野心、精力、献身に無限な領域と機会とを提供する。そういう進歩してやまない国家の様々な目標は必然的に物質的なものとなる。イザベルは、グレイ・マチューリンと共に、そういう世界の物質万能主義的な生き方を象徴する存在である。そういうイザベルと別れて、精神の自由を求める第一歩としてラリーはパリに赴いたのである。約束の2年間は瞬く間に過ぎた。イザベルは自らパリに足を運び、ラリーと次のような会話をする。

'When are you coming back to Chicago?'

'Chicago? I don't know. I haven't thought of it.'

'You said that if you hadn't got what you wanted after two years you'd give it up as a bad job.'

'I couldn't go back now. I'm on the threshold. I see vast lands of the spirit stretching out before me, beckoning, and I'm eager to travel them.'

'What do you expect to find in them?'

'The answers to my questions.' He gave her a glance that was almost playful, so that except that she knew him so well, she might have thought he was speaking in jest. 'I want to make up my mind whether God is or God is not, I want to find out why evil exists. I want to know whether I have an immortal soul or whether when I die it's the end.'[64]

努力が報いられなかったことを空しい所業と諦め、シカゴに戻って米国社会の有為なる人材として働き、自分との結婚を具体化してくれることを必死の思いをもって迫るイザベルに対し、現況は求めてやまぬ精神の世界の入り口に立っているにすぎないのだから、彼女の意を受け容れるわけにはいかないと突き放し、はじめて、神は存在するか否か、悪は何故存在するのか、魂は不滅か否か等々を究明してみたいという心境のほどを吐露する。自分の求めているものにすでに解答が与えられてはいても、ラリーは自分なりに納得の行く方法で追求していきたいと考える。その姿勢には他者の悲痛な願いをも頑なに拒絶するという堅牢さがみられるものである。《Larry, if you love me you can't give me up for a dream. You've had your fling. Come back with us to America.》と懇願するイザベルに対し、《I can't, darling. It would be death to me. It would be betrayal of my soul.》[65]と、ラリーは述べ、心の中の憑き物を取り払うため、精神の解放を得るために、最も身近かな存在としての婚約者でさえも突き放すのである。イザベルの心中にある哀切きわまりない恋慕の情を全身をもって感じながらも、その気持を斟酌する言葉を故意に用いないラリーの態度には早くも求道に徹するという厳しさがみられ、非情さをもってありとあらゆる障碍物を克服していくという求道者特有の超克の精神が宿っているといえよう。道を求めるには俗性の一切を断って非情にならざるを得ないという一徹な思念が働くわけである。また、このようなラリーの態度には、叙情的思考に欠けがちであるモーム自身の作家としての特性も垣間みられるような気がする。モームの作品によくみられる人間的な温かさの欠如について、コールダーは《幼少時代の不幸、肉体的ハンディキャップと彼が感じたもの、青年としてのほかの人間との不幸な経験に相応じて、彼は自由とつきはなした態度に保護を求めたのである。》[66]と、その由来のほどを述べる。情理を尽くして相手の気持を斟酌してやるという寛容さに欠け、その欠けた分を読者の心眼でもって補ってくれることをモームは暗に求めているともいえよう。

ラリーは放浪の旅に出た直後のパリで、《If you loved me you wouldn't make me so unhappy.》と追いすがるイザヤルに対し、《I do love you. Unfortunately sometimes one can't do what one thinks is right withought making someone else unhappy.》[67]と言い、不本意であっても、情況が人間関係の持続を許容しないことがあることを明言しているのである。ここでラリーはイザベルと婚約者としての関係を事実上断つことになるが、彼の心中には〈自愛の精神〉と〈自他を共々に犠牲にしなければならないという精神〉が奇妙に同居しているといえよう。また、未知なるものを求めるという究道性を金科玉条とし、それに係り

合ってくる凡俗な障碍物としての他者との関係を一切断つという自尊主義的な思念が無意識のうちに働いているともいえよう。この唯我独尊的に物事を処理していく思想には、相手も自分も犠牲にしてこそ道は求められるものであり、人間は、所詮、神たりえず、弱者として存在する不完全なものであるがゆえに、不本意ではあっても、そのような方法しかとれず、そういう方法論自体に自己満足をしなければならないという消極的な精神的マソヒズムが潜むものである。これはラリーの対人関係に時としてみられる症候である。魂の解放という道を求めるラリーの内部に潜むものは、イエス的思考とユダ的衝動が相剋しあう複雑な心理的葛藤である。この葛藤現象は後で触れるシュザンヌ・ルヴィエとの対応関係にも見られるものである。

己れの志向する道に到達するためには、自己を難攻不落な要塞と化し、次元の高い精神的弧高性を全うし、自愛の精神に徹するしか方法はない。また、一方では、婚約者としてのイザベルを拒絶し、彼女を慈しむ自己の内面に情念として燃えさかる愛の灯をも打ち消してこそ自己止揚は可能だと考える。このように、自己を守るために自己を否定する心理的葛藤を克服することこそ求道者がなさなければならないものである。道のために、自分の愛もイザベルの愛も生贄に供し、そうすることによってラリーは求道者としての主体性を堅持することができるし、それを高揚し続けていくことができるのである。このように、『人間の絆』のフィリップ、『月と六ペンス』のストリックランド、『剃刀の刃』のラリーに代表されるように、主人公の内面にひそむ心理的な相剋性がモームの作品を支える重要な要素となっていることはモーム研究者がよく指摘する通りである。かくして、ラリーは、俗性の象徴として、あるいは物質万能主義的な世界の象徴としての恋人を退け、観念的に平俗な世界から隠遁し、超己の次元性をもつアモラルの世界に入って行くのである。

ラリーとイザベルの関係が破局を迎える頃、話し手のモーム氏はラリーの放浪行脚が実は大変な営為であり、一つの目標（神）に向かって努力精進する姿であるとイザベルに説明し、ラリーの探求している問題に一つの解答を与えているのが14世紀のフランダーズの恍惚派神秘主義者（the Ecstatic Teacher）ロイスブルックであり、彼をみればほんの端緒ではあるが、ラリーの思想的指向についての判断がつくと説明している。ラリーは、《What I'm trying to tell you is that there are men who are possessed by an urge so strong to do some particular thing that they can't help themselves, they've got to do it. They're prepared to sacrifice everything to satisfy their yearning.[68]》とモーム氏が語るように、あることに対する猛烈な衝動に駆られ、それが何であるかを探求して行く執念の鬼となり、その過程に横たわる障碍物の一切を除去する厳烈なる自己を保持し続け、そして、たとえ、冷酷な利己主義者といわれようと、何といわれようとも、行く手に千山万岳あれども、わが道を行くという極めて強い主体性に裏付けられた行動の体系を築き上げて行くのである。

前に述べたように、『剃刀の刃』の主要登場人物はラリー、イザベル、エリオット、グレイ、シュザンヌ、ソフィー、そして作家モーム氏である。主要路線を突っ走しるのは前二者で、

イザベル、シュザンヌ、ソフィーは求道者としてのラリーにとっては〈女誘惑者〉であり、エリオットは祖国をすててヨーロッパに暮らし、虚栄心ばかりを追う〈俗物神士としての誘惑者〉であり、グレイは巨大な物的富者としてラリーの精神主義に対応する存在である。この五名の人物たちを時空即応に結びつけ、物語りの舵を取っていくのは語り手としてのモーム氏である。この語り手はいつでも、どこでも、超然たる態度(吃音という身体的障害がモームをして内省的にし、そこに超然たる態度の源泉があるとするのはコールダーである）をとり、登場人物たちを巧みに対応させながら物語りを展開させている。ラリーの精神的孤高性に対するものとして、イザベルの物質万能主義的世俗性があるが、この二人について〝男と女の関係〟という観点からも若干触れておきたい。

ラリーとイザベルの関係を規定づけているのは何といっても自己を保全するための合理的な計算性である。前者は精神解放の基盤を求めて自己を他者に譲ることはしないし、後者も、また、物質万能の世界に安心立命の境地を求めるが余り、他者に自己を譲ることはしない。この二人に共通するものは、次元的に異質なものではあるが、自己を保持するための合理的な計算性である。だから、間尺に合わないのはお互いに拒絶し、相容れざるものとしてみるのである。

イザベルはグレイと結婚はしても、それは彼女の物質崇拝主義的な感情を満足させるだけのもので、真の愛に飢える彼女の内面を充たすものではありえなかった。事実、彼女は《I've never loved anyone else in all my life.》といい、グレイに対しては《I was very fond of Grey; I'm very fond of him still. You don't know how sweet he is . No one in the world could be so kind and so considerate. He looks as though he had an awful temper, doesn't he? With me he's always been angelic. ..... We had a good time. I shall always be grateful to him for that. He made me very happy.》としつつも、《I suppose I diddn't really love him, but one can get on all right without love. At the bottom of my heart I hankered for Larry, ...》[69]と、心の底で求めるものはラリーであると真意のほどをのぞかせる。イザベルは物質の象徴としてグレイを手に入れながら、精神の象徴としてのラリーに手の届かないのを焦れったく感ずる。それでも、ラリーが独身でいる限りにおいては、彼女はラリーの求道のために自らを犠牲にして捧げ尽くしていると自負し、それをもって精神的な自慰とし、諦感する。彼女は充たされない想いをそういう形で償うのである。だが、一旦、ラリーの身辺に異変がおこり始めると、落ちつかなくなり、我慢ができないような激情に駆られる。ラリーを自分の分身として彼女は考えるのである。夫や子供を交通事故で失い、自棄の余り、倫落しきって日々酒、麻薬、情欲等に溺れ、地獄の業火に身をさらし続ける薄幸の女であり、イザベルの幼友であるソフィー・マクドナルドを救出せんものとして、ラリーが彼女との結婚を決意し、その準備を始めると、イザベルは卑劣な策略を用いてそれを阻止する。この時の彼女は文字通り鬼女となり果てるのである。イザベルは独占欲の権化とでも称すべきほどに強烈なる自我を押し通す女となるのである。

物心両面で満足しなければ我慢のできないイザベルの愛情感覚は情念の欠落したもので、

それは性的本能からくる動物的な次元性しかもたない情欲に基ずくものであるとモーム氏は指摘し、男女の恋愛関係で一番大事なものは情念であり、それには我欲を充たす計算は否定されなければならないとして、

'Unless love is passion, it's not love, but something else; and passion thrives not on satisfaction, but on impediment. .....'Passion doesn't count the cost. Pascal said that the heart has its reasons that reason takes no account of. If he meant what I think, he meant that when passion seizes the heart it invents reasons that seem not only plausible but conclusive to prove that the world is well lost for love. It convinces you that honour is well sacrificed and that shame is a cheap price to pay. Passion is destructive.[70]

と、情念の実態のほどを述べる。情念とはそのもののために全てを犠牲にしてはばからないものであり、全てを破壊しつくしてしまうほどに強力なものである。情念の情念たる所以はそういうところにある。愛情が育つには条件闘争は不要で、全ての障碍物を乗り越えてただひたすらに愛を求めて行くところに真の愛情は育つのである。ラリーとイザベルの懐き合う愛なるものは，条件次第でその形質が変るものであったという点で、真なるものからははるかに遠かったのである。

愛するのはラリーのみ、とイザベルをして言わしめるが、所詮、ラリーはイザベルにとって手の届かない存在であった。ラリーに対するイザベルの心中には独占欲に支えられた動物的情欲性の濃厚な愛情があっただけである。それは何かさかりのついた牝犬をも思わしめるように動物的なものとなり、時として、渇えた情欲として身体から吹き出すものであった。果たせない夢を懐き続けるがゆえに、イザベルのこのような動物的な情欲感はつのる一方であった。ラリーは烈火の如くにして燃えさかるイザベルの情欲の対象にはなるが、それの吐け口は、実質的には、良心の咎めもあってか、夫グレイに向けられるのが常であった。ラリーはイザベルにとってはいわゆる手の届かない存在であり、不可触的で純無垢な超現実的な存在であり、その精神的存在はいやがうえにも純化を重ねるという性格止揚を全うするのである。それにも拘らず、イザベルのラリーに対する愛情は不変なように思われた。だが、拝金主義者、即物主義者としての、また、動物的情欲にいろどられた愛情を無私の愛と錯覚するイザベルは、結局、ラリーの念願成就の日にラリーから実質的に見棄てられるのである。結婚したかった唯一の女性はソフィー・マクドナルドであった、とモーム氏にラリーは告白する。このとき、ラリーはイザベルの独占欲を粉々にする非情な鉄鎚を打ち下したのである。ラリーとイザベルが全然次元の違う人生をめいめい歩み出したことを知ったとき、イザベルはラリーを永遠に失ったことを認め、さめざめと泣く。モーム氏が指摘しているように、イザベルに欠けた最大のものは女らしい優しさ(tenderness)だったのかも知れない。兎に角、イザベルはラリーの全てを失ったのである。

心に期するものがあって、アメリカを出てフランス（パリ）に来たラリーは、2年ほど大学の図書館や教室に通いながら、哲学、宗教、思想等の勉強に明け暮れていた。だが、そういう静なる研究態勢の持続だけでは、志向するものの核心には迫れないと考え、また、気分を転換し、思想の整理をする必要性を感じ、北フランスの炭坑に行き、二、三か月ほど肉体労働に従事した。そこであったのが前に触れたポーランド人のコスティである。ラリーは彼から、世界は神の創造物ではなく、ただ永遠なる自然の顕現にしかすぎなく、無から有が生まれる筈もなく、だから、善がそのまま神性の顕現であるように、悪もまたそうであるという説を授けられる。これは後述する印度に伝承される輪廻の思想を連想させるものであり、また、これはいわゆる善と悪とは相関関係にあって、自然発生的な共時性をもつものであるとするモームの認識そのものでもある。この世における善と悪とは本来根強い相関的な対立を示すものであるが、善を実践増強していくにつれて悪の相対的な劣勢化をはかるべきが人間の理想であり、そういう善の実践者として存在するのがラリーである。

ラリーは病弊に苦しむパリのモデル女シュザンヌに、一時的ではあるが、救いの手をさしのべる。また、すでに述べた通り、夫と子供を交通事故で失い、自らを生きる屍と化し、倫落の身となって地獄の業苦に酔いしれるソフィーを救う手段として結婚をも決意する。この二人との対応関係にはラリーの善の実践例がみられるが、その善がそれほどの効力を出せず、悪が依然として勢力を保っているのは善の実践を阻む要因が人間性の中や、生活還境の中にあるからだとモームは考える。前者シュザンヌとの対応関係においては、ラリー自身の指向する目標のために他者を一定の限度以上に自分に近づけないという自己保全上の拒絶の哲学が行動原理として働き、また、後者ソフィーの場合には、彼女を計略にかけて蹴落すイザベラの独占欲が善の実践を阻む要素としてあるわけである。善の実践にはこのように阻害条件としての悪がつきまとうのである。だから、善は実践化されてもそれぼどの効用性を出せない場合が多いわけである。善は悪に対し、悪は善に対し、相互に桎梏しあい、拮抗し合うという意味で、この両者は正に脱け難き相関関係にあるといえよう。

モームは、この世の中に善と悪が同居し、しかもそれらの存在が相関的に根強いものであることは、全能なる神にも否定しがたき瑕疵があることを示すものであるとし、神は十全ではあるが必ずしも万能ではない，と論駁する。万物の創造主としての神は悪に関与する限り無能であり、その限りでは万能ではありえないわけだ。そこで、悪を治癒しうる能力をもったものを人間の善の実践の中に求めるようになる。即ち、《The only God that is of use is a being who is personal, supreme, and good, and whose existence is certain as that two and two make four.》[71]と論ずるように、この世における我々人間は人格神を伝統的な創造主の欠陥を補うものとして求めなければならなくなっなわけである。前にみたラリーの善の実践は純粋な人間性に自分を近づけようとする一つの試みであり、それは自分の人格を神域に高める自己昇華であると考えられる。神の配慮が欠けたるがために多くの人間が苦しむ。そういう悪の劣勢化をはかるために、神の欠陥を補う行為者としての善の実践者が必要となるわけである。そう

いう求めに応じうるのがラリーである。彼は自己犠牲をいとなわない純一無雑で、無私に徹した人格にこそ神意は宿ると観る。そういう人間性の発場を可能にする者こそ、越川氏が《悪に抵抗し善を実践して純粋な人間性に自分を近づけようとすることは、とりもなおさず自分を神に近づけようとすることにほかならない。》[72]と論ずるように、もっとも人間的な意味での神であるわけだ。

だが、ラリーの善の実践は自己犠牲的な様相を呈しはするが、その本質において必ずしも自己犠牲の精神の十分なる発揚があるわけではない。《犠牲というのは、自己破壊的な情熱だ。ところが、ラリーは情熱的ではなく理性的な人物なのである。》[73]とも越川氏は述べる。この場合の〈理性的〉とは合理的な計算性を意味する。ラリーは寡黙で、内心を他人に示すことはめったにない。自分に向けられた他人の言動には極めて敏感でありながらもそれに対する反応には積極性がみられない。彼は世事一般に無反応を装うが、そうだからといって感受性が停鈍しているわけではない。物事は鋭敏に感じとるが、それが内訌しているのである。彼は一見して寛容で、何事にも拘泥しないようにみえるが、一旦、自己の活殺を掌る事物の選択に迫られると、情容赦なく他人を切り、自己を守り通す。自己の志向する道を追求するにあたっては彼は徹底的且つ計画的である。彼は偏執的なまでに自己を追求する情念の虜となる。それゆえ、彼は時に冷酷となり、無慈悲となり、汎俗に妥協することなく、野心を内に秘めたままの行動を重ねていく。シュザンヌ母娘に対する彼の態度にはそういう性格が垣間見られるものである。彼はシュザンヌに救いの手をさしのべながらも、結局、彼女のもとを去った。それは自己の胸奥に本来志向してきたものを求め続けなければならないという自我の叫びがあったからであり、そういう私心を去ることができなかったからである。自己保身の心があったのである。ところが、ソフィーとの関係においては、その魂を救ってやるために、自己の全てを抛つ強い決意をもつようになった。この時のラリーには純粋無私な我執を去った人間至高の精神の宿りがみられ、それこそ神の性に裏付けられた崇高な人格者であったのである。このように、ラリーの内面には相反し、対立し合う二つの心があり、それは〈無我の精神〉と〈我執の精神〉の相剋ともいえるものである。ソフィーを救いたいとする心はまごうことのない人間至高の無私の精神であり、そういう自己滅却をいとわない人間性こそ最も人間的な神であり、そういう神こそ悪を治癒するために必要なものだとモームは考える。この観点において今すこしくイザベルに目を向けてみよう。

イザベルは可能であるにも拘らず、独占欲と嫉妬心の虜となり、ソフィーの落ちこんだ惨状に手を差しのべようとはしなかった。そういうイザベルが、自己を犠牲にしてラリーから身を引いたと云々することに対し、モーム氏は自己犠牲の精神を、旧約聖書のヨハネ伝第25章13節の悪魔の誘惑に屈する神の子イエスの件、即ち

If thou wilt accept shame and disgrace, scourging, a crown of thorns and death on the cross, thou shalt save the human race, for greater love hath no man than this, that a man

lay down for his life for his friends. Jesus fell.

を引き合いに出しながら、

I only wanted to suggest to you that self-confidence is a passion so overwhelming that beside it even lust and hunger are trifling. It whirls its victim to destruction in the highest affirmation of his personality. The object doesn't matter; it may be worth while or it may be worthless. No wine is so intoxicating , no love so shattering, no vice so compelling. When he sacrifices himself man for a moment is greater than God, for how can God, infinite and omnipotent, sacrifice himself? At best he can only sacrifice his only begotten son[75].

と説くのである。倫落の身となり果てた薄幸の女ソフィーの魂を救ってやるために自己の全てを棄ててかかるラリーの在り方にこそ自己破壊を伴った真の自己犠牲があり、イザベルの云々するそれはその背後に秘められた自我を正当化する見せかけのものにすぎず、真に尊く美しきものはラリーにみられる自己犠牲の精神であるというわけである。人間は自己犠牲の精神に徹するとき、それを犠牲に供することのできない伝統的な神（特にキリスト教）よりも、はるかに偉大な存在になるとモームは考えるのである。ラリーは自分が信じている善の実践者としての人間的な神に己れを近づけていきつつ、一方において自己犠牲をいとわない姿勢を示すことによって、既成宗教の範疇から一歩もでることのできないいわゆる全能なる神を実質的に凌賀しているのだともいえる。モームは善の実践者ラリーに人間的な神の像をみとめ、我執を断って自己犠牲の精神を高揚するラリーを通して、犠牲ということに関しては全く無能な既成の神（伝統的なキリスト教）を痛烈に批判しているのである。

戦場で生死の分岐点を目撃したラリーは人生懐疑の念にとらわれるようになり、その答えを求めて四年間に亘って万巻の書を渉猟した。そのくだりについてラリーは

I'd had a lot of time to think. I kept on asking myself what life was for. After all it was only by luck that I was alive; I wanted to make something of my life, but I didn't know what. I'd never thought much about God. I began to think about Him now. I couldn't understand why there was evil in the world. I knew I was very ignorant; I didn't know anyone I could turn to and I wanted to learn, so I began to read at haphazard.

と述べる。だが、それも意に適わざるを知った。手段を変え、方向を転換する必要に迫られた。そのことを聞いたベネディクト派の修道僧エンスハイム神父は、誠心誠意の祈りによって全ての疑いは必ず解消され、礼拝三昧を重ねれば、その行為の中には自ずから心の平安が

得られるといって、ラリーを信仰の世界へ誘う。だが、ラリーは俄かに応ずる気持はもてないのである。彼はモーム氏に《I couldn't believe, I wnted to believe, but I couldn't believe in a God who wasn't better than the ordinary decent man.》と語り、並みの人間的存在しかしえない神など信じる気にはなれないという。これはモーム自身が自己の欠陥を欠陥として認めない既成宗教の奉る神を信ずることはできず、その欠落部分を補う人格神を求めるという気持そのものを表現した言葉である。モームは神を信じないわけではない。彼はただ従来の伝統主義的な既成宗教の祀る神、即ち、実際的に全能ではありえない神（キリスト教）の在り方に不信感をいだき続けるだけであった。モームは理性で納得の行く永遠不滅なるもの、あるいは神を渇望してやまなかったのである。彼は

When I look back on my life with its successes and its failures, its endless errors, its deceptions and its fulfilments, its joys and miseries, it seems to me strangely lacking in reality. It is shadowy and unsubstantial. It may be that my heart, having found rest nowhere, had some deep ancestral craving for God and immortality which my reason would have no truck with. In default of anything better it has seemed to me sometimes that I might pretend to myself that the goodness I have not so seldom after all come across in many of those I have encountered on my way had reality.[78]

と語るが、goodness こそ神性を伴った reality であると考えるわけである。

キリスト教関係者は神はこの世界を己れの栄光のために創ったという。だが、これは悪の存在を許した片手落ちとしての神の創造上の瑕疵を正当化する便法的な言い訳けにしかすぎず、悪をこの世にもたらした神の内には不純なものがあり、それを示しながら、自己の栄光のために創造する云々は神の自己擁護のエゴにすぎない、と語り手モーム氏は論ずる。そういう神は独善であり、世の中に悪と不平等をもたらしたという罪業の償いをしなければならないが、その点においても神は全く無能であり、しかも、被造物としての人間に戒律や罪を課し、人間とは生まれながらに罪多き存在であるという原罪意識をうえつけながら、自己の栄光のために諸悪を容認する形でこの世を創造したのが神だとすれば、そういう神を信ずることは愚かなことだとモームはラリーを体していう。人間はめいめいその能力に応じて最善(goodness)を尽くすことがもっとも人間らしい神への接近の仕方だが、あるべき道から外れて罪業を犯す人間がいたとしても、それは自分の力ではどうにもならない遺伝的体質のなせるわざであるか、または自らの意志で選択したものではない社会環境のせいでそうなったのである。だから、そういう自らの責任で犯したのではない罪業者に対し、地獄の劫火にでも突きおとすかのような形で罰を加える神なんて信ずるほうがどうにかしているというわけである。神が万物の創造主であるとするならば、原罪者としての人間は神の被造物であるから、罪を犯す性向を持つとすれば、責められて然るべきはそういう人間を創った神の意志そのものである筈だ。

だが、結局、冤罪に泣くのは被造者としての人間である。人間とは、既成宗教的な観点から判断する限り、神の栄光のために己れを奉げる生贄にすぎず、しかもその犠牲を償うものは、自己の魂が救済されるという与えられた観念以外には、何一つない空しい存在である。神とは己れの栄光を存続させるために大きな犠牲を人間に要求はするが、自分自身が犠牲になって救いの手を差しのべようとはしないまことに身勝手な存在である。既成宗教（特に、キリスト教）の奉る神をモームはこのように批判し、全智全能の神はなぜ悪のはびこるような世界を創ったのだろうかと、モームはラリーを通して次のように論ずる。

If an all-good and all-powerful God created the world, why did He create evil? The monks said, so that man by conquering the wickedness in him, by resisting temptation, by accepting pain and sorrow and misfortune as the trials sent by God to purify him, might at long last be made worthy to receive His grace. It seemed to me like sending a fellow with a message to some place and just to make it harder for him you constructed a maze that he had to get through, then dug a moat that he had to swim, and finally built a wall that he had to scale. I wasn't prepared to believe in an all-wise God who hadn't common sense. I didn't see why you shouldn't believe in a God who hadn't created the world, but had to make the best of the bad job he'd found, a being enormously better, wise, and greater than man, who strove with the evil he hadn't made and who you hoped might in the end overcome it. But on the other hand, I didn't see why you should[79].

罪は人間の試練のために神が造ったという考え方に反発し、万物の創造主ではないが、並の人間をこえ、賢明で、善なる存在でしかも常識の豊かな神、即ち、人間の過誤をみればそれを正し、悪と直面すればそれを回避することなく、懸命に闘い、それに打ち克つ努力をし、行動をする神（人格神）こそ信ずに値いするとし、〝神の栄光のため〟を大義名分にして戦争をおこし、迫害を加え、不当な原罪意識をうえつけ、人間（信者）に偽善と偏狭にみちた態度をとらせ、既成概念をふりかざし、教条主義という伝統の上にあぐらをかくキリスト教をモームは痛烈に批判しているのである。

修道院での求道生活を体験するうちに、伝統的なキリスト教の概念に束縛され、観念的先入主観の虜となっている修道士たちと相容れざることを識ったラリーはボンベイに向い、ラーマクリシュナ派の導師と会い、インドこそ求道の究極の地であると確信する。ここでラリーは創造の目的は魂の再生を前提にするものだというヒンズー教の輪廻説に接する。つまり、魂というのは前世での行為の功過にしたがって導きだされる果しない経験の連鎖であり、それは肉体から肉体へと遍歴を続けるものであり、一所不在的なものであり、永劫不変なるものとして継承されるものであり、それゆえ、人間の肉体は魂の仮宿の場にすぎず、それが亡んでも、魂は次の再生の場としての人間に継承され、永遠に生き続けるという考えである。

この考えの背景には

.....the conception that the universe has no beginning and no end, but passes everlastingly from growth to equilibrium, from equilibrium to decline, from decline to dissolution, from dissolution to growth, and so on to all eternity.....[80].

という円環の論理にみられる始めもなければ終りもないという壮大な思想がある。現世は魂が前世でなした所業に報いる一つの舞台であり、人間のなす所業は因果報応的に律せられ、善因善果、悪因悪果がその業の原形となるものであると考えるのがヒンズー教の魂の輪廻信仰だが、それは人間の不平等と現世の悪の存在を説明する最も有効な方法であるとラリーは考えるようになった。ラリーが長い旅路を辿って求めつづけてきたものは、結局、この輪廻の思想であったのである。

この輪廻説は1938年にモームが印度旅行をした際に首相(The Dewan)と対談した時に書きとめておいたものに拠るものである。モームは次のように記している。

I asked him if educated, cultured Hindus had still an active belief in Karma and transmigration. He answered with emphasis. "I absolutely believe in it myself with all the strength of my being. I am convinced that I have passed through innumerable lives before this one and that I shall have to pass through I do not know how many more before I secure release. Karma and transmigration are the only possibile explanations I can see for the inequalities of men and for the evil of the world. Unless I believed in them I should think the world meaningless."

I asked him if, believing this, the Hindu feared death less than the European. He took a little time to think of his answer, and, as I had already discovered was his way, while he was considering it, talked of something else so that I thought he was not going to answer. Then he said: "The Indian is not like the Japanese who has been taught from his earliest years that life is of no value and that there are a number of reasons for which he must not hesitate for an instant to sacrifice it. The Indian does not fear death because it will take him away from life, he fears it because there is uncertainty in what condition he may be born next. He can have no assurance that he will be born a Brahmin, an angel or even a God, he may be born a Sudra, a dog or a worm. When he thinks of death it is the future he fears[81]."

人間は、所詮、悟りを聞いて、煩悩と業の束縛からのがれるまで、魂の輪廻転生を諦念をもって受け入れなければならないわけである。ラリーは

'Has it occurred to you that transmigration is at once an explanation and a justification of the evil of the world? If the evils we suffer are the result of sins committed in our past lives we can bear them with resignation and hope that if in this one we strive towards virtue our future lives will be less afflicted. But it's easy enough to bear our own evils, all we need for that is a little manliness; what's intolerable is the evil, often so unmerited in appearance, that befalls others[82].

と、モーム氏に語るが、そこには自分自身に関することならいざしらず、他人にまでふりかかる不幸は実に堪え難く、束の間の人生から全てをとりあげてしまう無情な神への不満が表明されているといえよう。かつての戦友がラリーのために一命をおとすという冷酷な運命にさらされなければならなかった事態を思うと、そういう運命（悪）の前に手を拱いて無力な存在しか示しえなかった神、それを宇宙に遍在する盲目的な運命の力として因果論的に諦めなければならない人間の無力さ等に衝激と空しさを感じながらも、諦念の虜となり、なす術を失って拱手傍観主義に走り、他律依存的な態度に終始することは許されるべくもないとして、この世を去った戦友の魂を何としても慰めなければならないと考えるのはラリーである。ラリーは、結局、既に触れた通り、この世の悪の存在を説明し、それを正当化する手段としての輪廻転生の思想に問題解決の糸口をつかんだのである。

ところが、始めも終りもなく、未来永劫に生滅継起をくりかえしながら、人間の魂は永遠に生き続けていくという輪廻転生の思想は、受ける教育様式の如何に拘りなく、東洋人の間では血肉化されているとして、モームは『剃刀の刃』では高度な洋式教育を受けた大蔵大臣が地位、身分、財産、妻子等々の全てを棄てて一介の托鉢僧として流浪の旅に出ること、また、『作家の手帖』では今さき見た首相の因果報応論と輪廻信仰を説明しているが、はたして西洋人にそれが信じられるかどうか極めて疑問だと考える。宗教的な悟達の境地に達する心域は洋の東西を問うことなく共通して理解されることであるが、問題はその後の実践活動である。東洋人は衆生を済度し、彼等に力を与えることを願いはするが、実質的には現実の世界を去り、隠遁を至上のものとする傾向があるのに対して、西洋人は悟達の救いを得た後に現実の世界に戻り、そこで人々の魂の救済を願って積極的に実践活動を展開する傾向にあるといわれている。悟りを開いた後の実践活動において、洋の東西間には、このように方法論的な対照性がみられるのである。ラリーも究極においては西洋人に多くみられる方向をとることになる。このような悟達後の宗教関係者の実践活動ついて相良氏は《なるほど「剃刀の刃」で到達した汎神論的宇宙解釈は、それなりに窮極の結論のようにみえる。だが、おそらくモームには、完全に満足できなかった面があるだろう。というのは、モームはヒンズー教を研究し、インドにも行き、また自ら法悦を感じたというから、ラリーの遍歴はモームの心の遍歴に他ならないわけであるが、ラリーはそのあと、隠遁する代りに、現実の世界に戻ってくる。

ラリーはモームと同じく、現実における生き方を重視し、それについて模索しないではいられないヨーロッパ人なのである。

ラリーは、悟達し救いを得た後に、アメリカに帰って、そこで、目標を誤り闇の中に彷徨する人々に、かすかでもよい、積極的に光をもたらすことを志している。ラリーの行動は、少しばかり隠遁的なヒンズー聖者の生き方とは異なり、いかにもキリスト教的な——そしてヨーロッパ的な——宗教の把握実践の仕方を示す。ラリーが言うところによれば、聖者シュリ・ガネシャも、衆生に済度し、彼らに力を与えることを願っている。それからみれば、ヒンズー教は単に隠遁を至上のものとしているのではないかもしれない。しかし、シュリ・ガネシャは、自らは山中に定住し、来り訪うものにのみ教えを垂れる。ヨーロッパ的モラルあるいは宗教は、単に悟りに達し、絶対と合一し、苦の世界に脱して二度と地上に戻らぬという、自己の霊魂の救済だけでは、信仰あるいは宗教の意味がないとする。[83]》と論じ、宗教的実践倫理の相違点を指摘している。

ラリーが魂の自由を求めて放浪の旅に出た目的は再生への絆から解放されるための行動を重ねることであり、それは究極において悟りを開き、煩悩と業の束縛からのがれるための行動のつみ重ねに他ならない。印度人は生・死・再生の遁環という永遠回帰あるいは永遠の連鎖を存在苦と観じ、それから解放される境地を求めるのが人生における究極の目的だと考える。すでにみてきたように、印度における輪廻転生の教説は《肉体は霊魂の仮の器であって、あらゆる生とし生けるものは自己の過去の行為の結果としての生を享けるものであるという。これははインドにおいては特定の教派の教えではなく、 汎インド的世界観となるにいたった。[84]》であるが、この思想は《人間の霊魂は肉体に囚人のようにとじこめられ、死と人間もしくは動物への再生の繰り返しによって転生(me tem psýchōsis)するので、その連鎖から人間を解放することは人間の神聖なつとめである.....。[85]》と説く。これは古代ギリシャの霊肉二元論と同一のものであり、また、生・死・復活（再生）という遁環思想を中心教説とする原始キリスト教にも共通するものである。この三者に共通してみられるのは、死は生命の絶対的終焉ではなく、再生への過渡的段階であり、人間の霊魂は、諸々の試練に堪えるという苦行を重ねることによって生・死・再生というサイクルの中で永遠に生き続けるという思想である。ラリーは自分のさ迷う魂・思念の依り拠をこの思想に求めていたわけである。

ヒンズー教は〈霊魂〉(the soul)を〈最高の自我〉(the atman)とよぶ。彼等はアートマンを

'Liberation from the bondage of rebirth. According to the Vedantists the self, which they call the atman and we call the soul, is distinct from the body and its senses, distinct from the mind and its intelligence; it is not part of the Absolute, for the Absolute, being infinite, can have no parts, but the Absolute itself. It is uncreated; it has existed from eternity and when at last it has cast off the seven veils of ignorance will return to the

infinitude from which it came. It is like a drop of water that has arisen from the sea and in a shower has fallen into a puddle, then drifts into a brook, finds its way into a stream, after that into a river, passing through mountain gorges and wide plains, winding this way and that, obstructed by rocks and fallen trees, till at last it reaches the boundless sea from which it rose.[86]'

と説明する。ラリーの求めるものは生生流転してなお不変である絶対者 (the Absalute) であり、それはつまり〈実在〉(Reality・Brahman)であるとして

Reality. You can't say what it is; you can only say what it isn't. It's inexpressible. The Indians call it Brahman. It's no where and everywhere. All things imply and depend upon it. It's not person, it's not a thing, it's not a cause. It has no qualities. It transcends permanence and change; whole and part, finite and infinite. It is eternal because its completeness and perfection are unrelated to time. It is truth and freedom[87].

とラリーは論ずる。これは汎神的解釈に基づく究極の実在論であり、最高の自我こそ絶対者であり、それは普遍なるものであり、不滅なるものとしての霊魂であるという。なお、『宗教学辞典』は、この霊魂について、《霊は、すぐれて神妙なもの、神、たましい、こころ、いのちなど多様な意味をもっている。魂は、たましい、とくに肉体をつかさどる魄に対して精神をつかさどる精気をいい、こころ、おもいなども意味している。霊魂はしたがって霊と魂魄、両方の意味をふくむ概念として用いられるが、ふつう、個人の肉体および精神活動をつかさどる独立の人格的な実在で、感覚による認識を超えた永遠の存在を意味している。》[88]と、説明している。

ヒンズー教は霊魂を最高の自我とよび、それの不滅を信ずる。だが、モームは無限の過去から存在し、無限の未来に続くという霊魂不滅説、あるいは輪廻転生の思想に興味は示しながらも、霊魂の絶対性や不遍性は認め難いと考える。東洋人にとって輪廻転生の思想を信ずることは人生を有意義なものにする唯一のものであり、それゆえ、霊魂が肉体の滅亡と共に消え去ってしまえば、人生とは全く無意味なものになるわけである。しかし、そういう考え方に対し、モームは否定的な見解をとる。彼は肉体と精神の相互依存的連結を確信し、肉体が破滅してしまえば、それに殉じて精神も自懐作用をおこし、全ては無に帰するのだと考え、生存ということでなんらかの価値あるものは

For my part I cannot see how consciousness can persist when its physical basis has been destroyed, and I am too sure of the interconnexion of my body and my mind to think that

any survival of my consciousness apart from my body would be in any sense the survival of myself. Even if one could persuade oneself that there was any truth in suggestion that the human consciousness survives in some general consciousness, there would be small comfort in it, and to be satisfied with the notion that one survives in such spiritual force as one has produced is merely to cheat oneself with idle words. The only survival that has any value is the complete survival of the individual[89].

と論じ、死後の霊魂の存在論に痛打をあびせ、次のように人生についての見解を述べる。

There is no reason for life and life has no meaning. We are here, inhabitants for a little while of a small planet, revolving round a minor star which in its turn is a member of one of unnumbered galaxies. It may be that this planet alone can support life, or it may be that in other parts of the universe other planets have had the possibility of forming a suitable environment to that substance from which, we suppose, along the vast course of time the men we are have been gradually created. And if the astronomer tells us truth this planet will eventually reach a condition when living things can no longer exist upon it and at long last the universe will attain that final stage of equilibrium when nothing more can happen. Aeons and aeons before this man will have disappeared. Is it possible to suppose that it will matter then that he ever existed? He will have been a chapter in the history of the universe as pointless as the chapter in which is written the life stories of the strange monsters that inhabited the primeval earth[90].

と論じ、この束の間の遊星の住人として完全な生存をすれば、それ自体が価値あるものであると考える。人間は人間らしく現実の世界に生きるものとして最善を尽くすことが一番大事なことであり、観念操作でつくり上げられる人生論なんて無意味なもので、それにまどわされることなく、心身共に存分に活性化し、個人的に実の人生を精一杯生きながえることが人生の唯一の価値であると考えるわけである。

モームは個人の完全な生存とは自己を主張し、自我を満足させることであるという。それは、換言すれば、人間の本質たる利己心(egoism)を満足させることである。そこには自我の実現があるからである。だが、自我を実現するための自己主帳はたえず他人のそれによって制限されるものである。それで人間は利己心を充たすことを何よりも優先して考えながらも、他人と必然的に競合しあわなければならないという立場上、自分の主張(欲望)をどう制限しなければならないかを考えなければならないわけである。このことを道学者たちは普通自己犠牲とよび、その名における人間の行動こそ完全に自我を実現する方法であると考える。だが、モームはそれは真実ではないと考え、

I came to the conclusion that man aimed at nothing but his own pleasure and that when he sacrificed himself for others it was only an illusion that led him to believe that he was seeking anything but his own gratification. And since the future was uncertain it was only common sense to seize every pleasure that the moment offered . I decided that right and wrong were merely words and that the rules of conduct were no more than conventions that men had set up to serve their own selfish purposes.[91]

と論じている。そして、自己犠牲が徳操として価値を有するのは、それが自己発展の土台となる時である、とモームは皮肉る。

この観点に立てば、ラリーが求道の鬼となって全てを犠牲にするのは一種の自己保身のためであり、己れを慈しむがためである。だが、そういう考え方とはうらはらに、モームは何も求めずに自己犠牲を積極的に受け入れる純粋な精神の世界に一種の憧憬にも似た目を向けていたとも考えられる。『月と六ペンス』や『剃刀の刃』の主人公がモームの精神的分身であることを考えれば、このことは容易に首肯できることである。モームは人間には何も求めない真の自己犠牲の精神などという高次の徳操はありえないとしながらも、それに憧れ、それを求めるという自家憧着的な気持があったようである。だから、彼は次々と形を変え、態を変えして、魂の真の在り方を求めて劇から小説へ、小説から評論や随筆へと果しなくさ迷い歩いていたのである。種々の作品に、精神の自由をテーマとし、そこに自己を投与し、それをもって都度都度のカタルシスとしたのである。それゆえ、彼はどの作品でも普遍的な性格をもった人物を描くことはできなかったのである。兎に角、モームは純正無私な精神にあこがれた。人生において物的基盤を完成した人間に必要なものは精神の充足だけだからである。モームは30代にそれを成し遂げたので、この後は自ら入りえなかった清純な曇りと濁りのない精神の世界に心の糧を求め、作品から作品へと彷徨していたわけである。

モーム氏は、論廻転生の思想が語るように、最高の自我が霊魂であり、それが永遠無窮の絶対であり、不滅なものであるならば、そういう純粋な理念的なものに果して苦界をさ迷う人間に慰めや励ましを与えてくれる能力があるのか、それがないからこそ人間は人格神に悩みや迷いを解消してくれるのを求めるのではないかと反問し、《Men have always wanted a personal God to wham they can turn in distress for comfort and encoaragement.[92]》と続ける。これに対し、ラリーは、人間の魂の救済の対象としての神について次のように論じる。

'It may be that at some far distant day greater insight will show them that they must look for comfort and encouragement in their own souls. I myself think that the need to worship is no more than the survival of an old remembrance of cruel gods that had to be propitiated. I believe that God is within me or nowhere.[93]

自己救済は各々の心の中の問題であるとし、己れの魂の中に神の顕現を求めているわけである。それは純粋な知的認識を通して感知される人間それぞれの内なる存在としての実在であるというわけである。このことを感覚として掌握するにはそれ相応の知の練磨と精神の修行が必要となる。己れの魂の中にある神を求めて、それを実感的に掌握するために、ラリーは全てをすてて非情な精神行脚の旅に出たのである。そしてラリーは旅路も終りに近いところで、シヤランカの説いた《.....; it asks only that you should have a passionate craving to know Reality ; it states that you can experience God as suvely as you can experience joy or pain.[94]》を引き、情熱的な求道の心さえあれば、人間は認識を通して実在(Reality)に到達できるという一元論(Advaita)に満足を覚え、そういう境地に達した聖者が印度には大勢いることを知る。これはモームが印度に旅行した際に感得した体験的認識そのものであると考えられる。それでも、究極における実在としての神に到達するには高度な知力が必要になるので、ラリーがシュザンヌやソフィーに示した愛や善行を通しての救済を可能にする人格をもった神が普通の人々には必要だと考える。これこそモームが求めてやまない常識と思いやりのある神、すなわち人格神なのである。

人間は弱者として存在するがゆえに、いつでもそれを救助してくるものを身近かに求める。そういう要請に応じてくれるのが常識と思いやりを備えた人格神である。済度というのが、今みたように、愛や善行を通じて可能だという考えを印度の聖者たちは受け入れるが、《……the noblest way, though the hardest, is the way of knowledge, for its instrument is the most precious faculty of man,his reason.[95]》とラリーが論ずるように、神とは認識(理性)を通して自己の内なる魂の中にあるものとして感得されるものであり、人間が能力としてもつ理性こそは神への道を案内してくれる最も大事な手段である、と彼等は考える。たとえその方法が高度な知的営為を要求するとしても、絶対唯一者としての神を感知することは理性を通す以外に方法はないわけである。だが、モームはこのような認識論的な観念としての神を認めない。彼は不可知論者なので、実在の最後の根拠は認識しえないとして、神のような経験を超越するものは問題にしないという姿勢を示す。だからといって、モームが神の存在を信じないわけではない。前にも引いたが、彼は『サミング・アップ』(ペンギン版)の最後の頁で《It may be that my heart, having found rest nowhere, had some deep ancestral craving for God and immortality which my reason would have no truck with.[96]》と述べ、掌握することができないにしても、モーム自身の胸奥に神と絶対不滅性を求める声なき声があることを彼は自ら容認し、そして求めてやまないのは、《The only God that is of use is a being who is personal, supreme,and good,and whose existence is as certain as that two and too make four.[97]》と述べるように、全てを納得の行くように説明してくれるような性質をもった神、即ち、人格神であったのである。だから、宇宙の森羅万象を観念的にしか説明しえず、矛盾を矛盾として放置する既成宗教としてのキリスト教にモームは反発を示すのである。

ラリーが到達した汎神論的な宇宙解釈はモーム自身のそれであり、そういうモームの発想

の根源にはスピノザ哲学があると考えられている。スピノザの哲学は、神に酔う人と称されるように、神が発想の中心になるが、それはキリスト教でいう神や万物の創造主としての神ではない。スピノザは存在の究極的原因は神（実在）であるとし、その属性は〝無限〟であるとした。彼は《すべて存在するものは神のうちにある。神なしでは考えられない。》[98]と述べるが、すべてのものは神の顕現であり、宇宙全体が神であり、人間も動物も植物もそれを離れては存在しないような万物の原因が即ち神であるわけである。この世、この宇宙のすべてには神意の宿りがあり、それらは神性の顕現であり、表象であるというのである。これはまさしくラリーの考えであり、モーム自身の想念に他ならない。前に述べたように、実在を知りたいという情熱的な求道心があれば、人間は歓喜や苦痛を経験できるように、神をも確実に経験できるという一元論を引き、印度には神を自ら経験しうる聖者が大勢いるという事実に触発され、また、神は己れの魂の中にあるのだという考えに則って、自らもまた善の実践を通して神への接近をはかるのがラリーである。彼は我執を去った無私の善意に裏打ちされた行為にこそ人格神の投影はあるのだと考える。宇宙の究極の実在は絶対者であり、世の森羅万像は全て絶対者の顕現であり、従って、人間に内在する無私の善意は崇高なる神聖のあらわれであり、それは実在そのものであるとラリーは考えるのである。

ラリーは印度に来て3年後にシュリ（聖）ガネーシヤ（Shri Ganesha）と会い、探し求めていた人がこの聖人であることを確信し、その弟子となる。読書をし、瞑想に耽け、散歩をすることを日々の勤めとし、時として聖人の講説に耳を傾けたりする修行に専念した。シュリ・ガネーシャが弟子たちに求めるのは〝解放〟であり、それは小我、情念、官能の奴隷からの解放であり、進言してやまなかったのは《……that they could acquire liberation by tranquility, restraint, renunciation, resignation, by steadfastness of mind and by an ardent desire for freedom.》[99]であり、そういう状態に己れをおいてはじめて自己解放は達成でるというわけである。自由への道は知恵であり、済度を得るためには出家脱俗は必ずしも必要ではなく、小我をすてた一切無私の行為こそ心を清浄なものにしてくれるものであり、諸々の勤行は個我を滅却し、宇宙の大我と一つのものになるための機会にしかすぎないと諭す。この宇宙の大我と一つになる心境をラリーは後日〝山項の悟り〟として経験する。小我をすて、己れを空しくし、我欲をすてることによって人間は最高の自我（アートマン）に到達することができる。その時、清らかな慈悲心と人を救う力が心に漲るのである。これこそラリーが悟りを聞いた後に感じた清澄なる心境であったのである。

ラリーはシュリ・ガネーシャの門弟となり、庵室（アシュラマ）暮らしをするようになってから二年ほど経ったある日、自分の誕生日を一人ですごすために、山上の隠れ家へ出かけた。翌朝未明に起きて、樹下に座り、夜明けを待った。粛然と静まりかえった山頂で、荘厳な日の出を迎えた。

I sat down under a tree and waited. It was night still , but the stars were pale in the sky, and day was at hand. I had a strange feeling of suspense. So gradually that I was

hardly aware of it light began to filter through the darkness, slowly, like a mysterious figure slinking between the trees. I felt my heart beating as though at the approach of danger. The sun rose.[100]

と、ラリーは日の出の始まる様子とそれに対する心境のほどを述べ、

……how grand the sight was that was displayed before me as the day broke in its splendour.Those mountains with their deep jungle,the mist still entangled in the treetops, and the bottomless lake far below me. The sun canght the lake through a cleft in the heights and it shone like burnished steel. I was ravished with the beauty of the world. I'd never known such exaltation and such a transcendent joy. I had a strange sensation, a tingling that arose in my feet and travelled up to my head, and I felt as though I were suddenly released from my body and as pure spirit partook of a loveliness I had never conceived. I had a sense that a knowledge more than human possessed me, so that everything that had been confused was clear and everything that had perplexed me was explained. I was so happy that it was pain and I struggled to release myself from it, for I felt that if it lasted a moment longer I should die; and yet it was such rapture that I was ready to die rather than forgo it. How can I tell you what I felt? No words can tell the ecstasy of my bliss. When I came to myself I was exhausted and trembling, I fell asleep.[101]

と日の出の雄大な景観に感嘆し、恍惚となり、己れを忘れてしまった。これこそ没我の境地であり、無念無想の心境であり、自己滅却感の最たるものである。このようにして自己の存在を忘れさせるような絶対美の中に容解していくような自然と自己との一体感、そういう情況にのめりこんで至福の恍惚感に酔いしれるラリーの姿を我々はここにみるが、そのことを越川氏は《利己的な意識あるいは自己の意識を脱却した心境である。自己の意識の消滅とは主観と客観、自と他の一体観にほかならない。》[102]と述べる。ラリーの心に未だ経験したことのない新しい領域がひらけたのである。未だ気のつかなかった境地が自覚されたのである。これは神秘体験そのものであり、そこには言語的思惟をこえた直観の世界があり、実体感や歓喜高揚感があり、従来の煩悩や我執の絆から解放され、今までの迷妄や苦悩は消滅し、喜悦と希望にみちた自由で平和で、清浄な心域が力強くひらけてくるのであった。これが、ラリーが心の自由を求め、全てを棄てて、精神行脚の旅に出てから10年近くの歳月を経てついに到達した自己解放の瞬間であり、悟りの瞬間である。この深閑たる山頂に展開される息をのむような美のページェントにはモームの唯美思想の余韻が感じられるが、彼の美意識は『人間の絆』、『月と六ペンス』、『剃刀の刃』を通して変わることなく続くのである。だが、この

ラリーが経験する宇宙との一体感は何も目新しいものではない。彼はイザベルとの婚約が破局を迎えるパリでの話し合いで、無限なるものとの一体感には限りない精神的な喜びがあるとし、自ら宇宙という壮大無限なものに溶解していく自己滅却的な感動として、空軍時代に彼が経験したことを、次のように語る。

I wish I could make you see how much fuller the life I offer you is than anything you have a conception of. I wish I could make you see how exciting the life of the spirit is and how rich in experience. It's illimitable. It's such a happy life. There's only one thing like it, when you're up in a plane by yourself, high , high, and only infinity surrounds you. You are intoxicated by the boundless space. You feel such a sense of exhilaraion that you wouldn't exchange it for all the power and glory in the world.[103]

この大空の単独飛行、山頂の日の出という荘厳な宇宙と自己との一体感こそ純正な没我の境地であり、それはありとあらゆるものを超越する至福である。そういう自己滅却的な感応の世界には精神生活の充実した最高のよさがあるとラリーは考える。ラリーは精神行脚の旅に出る前と、その旅路の終末に全く同じ現象を経験している。見方によっては、越川氏が指摘するように、これはモームの神秘思想の展開が不十分であることを示すものであり、モチーフの取り組が一向に進展をみせることなく、その分だけ作品が停鈍化し、迫力に欠けるという印象を与えるものでもある。読者にとってはラリーの山頂の悟りを誘発する情況の設定は空軍時代の飛行描写の二番煎じとしての印象を受け、その分だけ物足りなさを禁じえないことになるのであろうが、また、他方、後者は、地上の大自然、人間、天上の大自然（宇宙）という三者を一体なるものとして捉えた雄大無比なるものとして、前者を補強した極めて迫力ある展開であるとの解釈も成り立つ筈である。いずれにせよ、大自然の荘厳な営みの中にラリーは魂が身体から抜け出て行くような解放感を覚え、そこに究極的な悟りを開き、長い長い求道の旅路はかくしてその終焉をみたのである。

神が全智全能の創造主であるならば、なぜこの世に悪を創って無力な人間を苦しめるのか——この疑問への適切なる解答をキリスト教に見い出し得なかったラリーは、印度にわたり、彼地こそ求めるものを与えてくれる究極の地であると確信し、ヒンズー教の導師から〈絶対者への帰一〉という思想を学ぶ。そして、今みてきたように、山頂で歓喜の夜明けを迎え、自己解放を達成し、悟りを開いたのである。ラリーは、難行苦行を積みながらまだ時宜を得ずして悟りの日の来るのを待ち続ける人々の多い修業の世界の厳しい実情に鑑みて、己れの悟りなどまだまだだと考える。だが、実在との一体化という体験については

Isn't it at least possible that these experiences of oneness with Reality that so many diverse persons have had point to a development in the human consciousness of a sixth

sense which in the far, far future will be common to all men so that they may have as direct a perception of the Absolute as we have now of the objects of sense?[104]

と問い、将来、人間の進化の歴史が示すように、人間の意識や知力が極めて高度はものとなり、絶対者に対する認識が直接的な知覚として把捉される日が来る筈だ。そうなければ、神を自ら経験するのは、何も特定の一部の修行者ではなく、全人類が共通して神を直に認識しうることはなると説く。人間の身体が進化してきたように、精神も進化し、知覚能力が発達し、ごく普通の人でも、〝絶対者は己れの魂の中にある〟として、神を自ら経験し、真実を掌握しうるような日が来るというラリーの考え方には、医者としての進化論的な感覚でもって将来の人間の精神の在り方を考察するモームの姿が反映されていて興味深いものがある。

前に、洋の東西の人々の間には概して悟りを開いた後の宗教的実践活動の形態には相違があるという相良氏の説（注83参照）を引用したが、このいわゆる西洋人の一人であるラリーは山頂の悟りを得た後、この世を厭離し、世俗に背を向けて、精神的孤高性を全うすべく僧院に隠遁することはその任にあらずとして

The spirit of life is strong in us. I felt more alive then, as I sat in my log cabin smoking my pipe, than I had ever felt before. I felt in myself an energy that cried out to be expended. It was not for me to leave the world and retire to a cloister, but to live in the world and love the objects of the world, not indeed for themselves, but for the Infinite that is in them. If in those moments of ecstasy I had indeed been one with the Absolute, then, if what they said was true, nothing could touch me and when I had worked out the karma of my present life I should return no more. The thought filled me with dismay. I wanted to live again and again. I was willing to accept every sort of life, no matter what its pain and sorrow; I felt that only life after life, life after life could satisfy my eagerness, my vigour, and my curiosity.[105]

と語る。どんなに苦しくても、どんなに辛く、どんなに悲しい生であろうとも、それは本質的には永遠ではあり得ず、この世のものという仮象にすぎず、輪廻転生という魂の再生の過程にこそ永遠はあるものと考え、あらゆる種類の生をあるがままに受け容れる気持をラリーは持つようになったわけである。これがラリーが精神行脚の末に到達した結論である。

この世での満足というのは束の間のものにしかすぎず、〝存在の本質は変化である〟と考えれば、生まれては消え、消えては生まれてくる現し世の中で不滅なるものは善としての霊魂であり、それこそ現世をつらぬく永遠回帰の絶対であり、再生を繰り返す魂にこそ価値の一切は宿るということが自明なものとなるのである。この世の悪は善と相関する形で存在する必要悪なものであり、それは善を高揚し、それの力を増強する触媒的な役割をはたすもの

であり、善も悪も前世の因果報応としての相関物であると説明する輪廻転生の思想にラリーは満足を覚えるのであった。

ラリーの長い求道のきっかけとなったのは悪の問題（戦友の戦死）であった。19世紀に、回教、キリスト教などの要素も摂取し、ヒンズー教の改革派を創造したラーマクリシュナは、世界は神の戯であるとし、

In this game there are joy and sorrow, virtue and vice, knowledge and ignorance, good and evil. The game cannot continue if sin and suffering are altogether eliminated from the creation.[106]

と考える。そういう彼に反発し、ラリーは

I would reject that with all my strength. The best I can suggest is that when the Absolute manifested itself in the world evil was the natural correlation of good. You could never have had the stupendous beauty of the Himalayas without the unimaginable horror of a convulsion of the earth's crust. The Chinese craftsman who makes a vase in what they call eggshell porcelain can give it a lovely shape, ornament it with a beautiful design, stain it a ravishing colour, and give it a perfect glaze, but from its very nature he can't make it anything but fragile. If you drop it on the floor it will break into a dozen fragments. Isn't it possible in the same way that the values we cherish in the world can only exist in combination with evil?[107]

と考える。

ラリーは精神行脚の根本的理由になった悪というものを、善との相関物とか、遺伝的体質または社会環境のつくりだすものとか、前世で犯した罪の因業であるとしてしか説明しえない。そういう彼の姿勢に対し、越川氏は《……，ラリーのいわゆる精神行脚だが、彼はいろんな思想家や宗教家に意見を求めたり教えを乞うたりするけれども、彼自身が深い思索の結果悟りに到るという姿勢が稀薄なため、他人の思想の収集家の段階に止まってしまい、「ものに内在する無限のもの」を深ろうとする彼の努力は一向に突っ込みをみせず、ただもう散漫にひろがっていくばかりである。ヨガの行者が川の水の上を歩いた話をして、君はそれを信じるのかと問い返されると、ラリーは、自分にその話をしてくれた男はそれを信じていたと答えるだけである。また「悪」をめぐる彼の思索は、全能の神がなぜ悪をつくったのかという疑問を徒らに堂々めぐりするだけで一向に進展しないまま、現世の苦悩は前世で犯した結果だという単純至極な輪廻の思想をもちだして焦点を一層ぼかしてしまう。揚句の果てに陶磁器は美しいものほど脆弱だという話をもちだし、それと同じ理屈で「僕らがこの世で大切

にしているところの価値あるものは、悪と結びついて存在できるにすぎないのではないでしょうか」(p.270)という問いかけめいた感想を披瀝する。久しい行脚をしたラリーから私たちがききだす「悪」についての思索の結論はこのように、ほんの思いつきみたいなものにすぎないのである。ラリーの精神行脚を語る意図は、失敗に終ったのだ。[108]》と述べ、深い思索の展開のなさに物足りなさを感じているようである。実際『人間の絆』、『月と六ペンス』、『剃刀の刃』、『サミング・アップ』等々を読んでいると、モームの悪に対する究極的な考えが奈辺にあるのか、それを掌握するのに苦労と戸迷いを感ずるものである。『剃刀の刃』でラリーを体して展開する論理以上のものは出てこないのではないかと訝りたくなるほどである。

いずれにせよ、ラリーは下山し、帰国を決意し、師と別れる。彼は金を成功の象徴とする物質的繁栄を人生最大の理想とする米国人の生き方は間違いで、人間最高の理想は平静、忍耐、憐れみ、無私、節制等をもって自己完成を目指すことにあると喝破する。この考えの背後には、人間の幸福とは物にあるのではなく、心にあるのだという東洋人の生き方を日々の生活実践の中に導入し、従前の物質万能主義的な生活に精神要素を注入することによって活を入れ、新しい変化を求めるべきだというモームの主張があると考えられよう。人間の日々の営みの理想とするのは物心両面に均衡のとれた生活の体系である。東洋の心を西洋の物に注入することによって、西洋人、特にアメリカ人の生活は均衡のとれた理想的はものになると考えられる。この観点に立てば、ラリーが金銭は自己破滅につながるものだとして、財産を処分し、無一文になって善の実践を遂行しょうとする意志とその行動は常識的には受容しがたきものであり、陳腐であるといえよう。金は人間の行動を保障するからである。ラリーが余りにも観念的に所在し、実在感に欠けるという印象を与えるのは、そういう極めて人間的な常識としての金銭の所有をも否定してかかるからである。それはそれとして、ラリーは物質万能という個人主義的な風潮がはびこる米国で、今みた徳目をもって善の実践を行い、すこしでも米国人が自己完成の理想に向って歩めるよう努力をしたいと考える。彼の善の実践躬行はその影響力において微細なものではあっても、それは池に小さな石を投じた結果としてできる漣波にも似て、人格的影響を他人に及ぼさずにはおかないものがある筈だと考える。彼は

But can you for a moment imagine that you, one man, can have any effect on such a restless, busy, lawless, intensely individualistic people as the people of America? You might as well try to hold back the waters of the Mississippi with your bare hands.[109]

とモーム氏が皮肉るのに対し、

I can try. It was one man who invented the wheel. It was one man who discovered the law of gravitation. Nothing that happens is without effect. If you throw a stone in a pond

the universe isn't quite the same as it was before. It's a mistake to think that those holy men of India lead useless lives. They are a shining light in the darkness. They represent an ideal that is a refreshment to their fellows; the common run may never attain it, but they respect it and it affects their lives for good. When a man becomes pure and perfect the influence of his character spreads so that they who seek truth are naturally drawn to him. It may be that if I lead the life I've planned for myself it may affect others; the effect may be no greater than the ripple caused by a stone thrown in a pond, but one ripple causes another, and that one a third; it's just possible that a few people will see that my way of life offers happiness and peace, and that they in their turn will teach what they have learnt to others.[110]

とその信念のほどを強く示すのである。ある人間が完全で，純粋なものになる場合、その人格的影響は必ずひろまり、真理を求める人間を惹きつける、という考えは真実そのものであろう。結局、ラリーはパリで精神行脚の旅程を一冊の書にまとめあげ、それから米国に帰り、タクシー運転手になって、ニューヨークに落ちつくことになる。求道の旅を終えたラリーに対して、語り手モーム氏は自分自身を俗中の俗であるとして、ラリーが体現している人間像を立派なものとして感歎の目を向ける。そして念願成就後のラリーを次のようにみている。

He is without ambition and he has no desire for fame; to become anything of a public figure would be deeply distasteful to him; and it may be that he is satisfied to lead his chosen life and be no more than just himself. He is too modest to set himself up as an example to others; but it may be he thinks that a few uncertain souls, drawn to him like moths to a candle, will be brought in time to share his own glowing belief that ultimate satisfaction can only be found in the life of the spirit, and that by himself following with selflessness and renunciation the path of perfection he will serve as well as if he wrote books or addressed multitudes.[111]

ラリーが求道者として得た究極的なものは、善の実践を通して悪の劣勢化をはかることであり、精神生活を豊かなものにする思考と行動を展開をすることによって、人間は最大の理想とする自己完成を実現することができるという信念であり、自己認識であったといえよう。それは、人間が指向すべき究極的満足というのは精神の営為の中にしかなく、そういう精神生活を営む過程にこそ自己完成の基盤があるという認識であったのである。

モームは自ら求めながらも、結局、行きつけなかった人間のもつ崇高な精神性をラリーを通して体現し、それをもって彼は自己のカタルシスとしたと考えられよう。

結び

モーム文学は人間性不変の論理をその基本思想とする。人間の本性というのは、歴史的時間や地理的空間という環境要素に順じて現象的に異なった感を与えるとはいっても、その本質においては何ら変るものではない。つまり、高潔さと卑劣さ、美しさと醜くさ、善と悪等の対応関係に表象されるように、人間の内奥には相矛盾し合う要素同士がせめぎあっているのである。このように相矛盾しあう要素を含みながら、時空を超越する形で、変りなきものとして存在するのが人間の精神であり、心の本然の姿である。そういう考え方がモームの主要作品の底流をなす基本思想である。

芸術は本源的にカタルシスである、とモームはいう。彼は心の中にうつ積する諸々の想念から脱出するために作品を次々と発表した。特に、『人間の絆』(41歳) 以後そういう心理的傾向をおびるようになった。彼は自己脱却のために物を書いたのである。だが、作品を発表し、その都度カタルシスは覚えはしても、なお生滅継起してやまない心の中の憑き物に彼は悩み続けた。モームはそういう内面的な拘束性から解放されることは生涯にわたってなかった。彼の生涯は憑き物への隷属として彩られるものであった。鋭敏な感受性をもっていたがために、幼少の頃から人一倍身心両面において傷嘆を覚え、その結果、彼は否応なく内省的にならずにはいられなかった。それゆえ、彼は必然的に隷属状態を過度ともいえるほど意識しなければならなかったのである。だから、財をなした後の彼にとっては心の解放こそ最も緊要なものであり、平安な精神生活こそ求めてやまないものであったのだ。モームの主要作品ののモチーフは、このように、隷属状態から自由への境地を目指す脱出行為そのものであったのである。人間の理念と人間の在り方を人間の性格研究に託して模索したモーム文学のテーマは、結局、人間は隷属と自由の複合構造のもとでしか生は営めないという厳しい現実観の中にあったといえよう。身心両面の傷ものというみじめさが生み出した最も重要な結果は、独立を確保し、苦痛から解放されようとする衝動であった。この衝動こそ彼の膨大な量の作品群を生み出す母体となるものであった。

『剃刀の刃』(70歳)── モームはキリスト教に代表される既成宗教を退け、何の代償も求めない純粋無私なる善の実践者の内奥に神性の宿りを認め、それをもって伝統的な神への代替神、即ち、人格神としたのである。信仰の問題を根源的に問い直しはしたものの、この程度の解決策しかモームは示しえなかった。彼は、悪の問題を輪廻転生の思想で解明するが、モームの分身としてのラリーは自ら思索を深めて懊悩するという姿勢に欠け、結局、宗教関係者の提供する資料を蒐集する段階にとどまり、それらを自ら思索した結果とつき合わせて、取捨をはかり、完全消化にもって行くというレベルにまではいたりえなかった。悪の問題の解明においては、モームは印度の輪廻転生の思想を概念的に踏襲した論理の展開しかしえず、斬新な自分なりの解釈論は打ち出せなかった。また、運命とか人生とかについても新たな視点に基づいく論理の展開をすることなく、処女作『ラムベスのライザ』(23歳) 以来繰り返え

してきた機械的決定論の域を出ることはなかった。印度再訪の機会が戦争で断たれたがゆえに、このように平俗な問題解決の仕方しかできなかったのであろう。

この作品で思想性の濃厚な内容の展開を試みているのは第六章である。だが、必要とあらばこの章はとばして読んでも、物語りを追う限りにおいては一向に差し支えはないとモームはいう。この章は最も重要なところであり、モーム自身が直接指摘しているように、この作品を執筆する動機も一にこの章に係っているのであるが、好み次第で省略も可能とわざわざ断るあたりにモームの自信のなさ、この作品への取り組みの浅さ、テーマの不燃焼性等をうかがわせるものがある。実際、テーマの展開の仕方も、1938年の印度旅行で蒐集した資料の焼き直し程度のものでしかないという印象を与えるものである。この作品を支える思想性は無視し、本来副次的なものであるべき物語り性を追ってもよいということは、この作品の基礎をなすテーマの処方に困惑し、それが手におえ難く、必然的に消化不良に陥っていることを物語る証左であり、作品全体としては所期の目的から外れた失敗作であることを言外に認めるようなものである。

そういう種々の取り組み上の限界や作品の欠点はあっても、『剃刀の刃』はモーム晩年の最大の野心作であり、それに相応するだけの内容をもっている点では変りはない。モームは印度の瑜伽(ヨガ)行者たちの在り方に精神的に純正化されたものを見い出し、彼等をモデルにしてラリーを創出し、彼を通して物質万能主義的風潮の中に埋れ、精も根も尽き果てて疲弊して行く人々に、精神生活にこそ人間至高の生の理想があると訴えているのである。現代資本主義社会の巨大なメカニズムの中に圧殺されて行く人々の魂を救うのには、彼等自ら本来の精神生活を取り戻し、無私の精神を高揚し、善の実践者になる以外には方法はありえないことをモームはラリーを通して強く訴えているのである。これは、宗教的意味での済度である。モームは宗教を否定しながら、宗教こそ現代人の魂を救える唯一の手段であると考えるのである。

『剃刀の刃』は現実の人間の汚れを、たとえ観念的ではあっても、洗い清めてくれるという浄化機能をもつものであり、人間が憧憬してやまない理想境への道案内をしてくれるのである。無私に徹し善を実践することがいかに人間の精神生活を豊かなものにするか、また、善の実践者の内奥には神性の宿りがあり、その行動には神性の顕現があり、それこそ現代社会の求める人格神であるという。そういう認識を与えてくれる点でもこの作品は有益な社会性をもったものであるといえよう。また、ラリーは物質万能主義、立身出世主義に対する反俗精神の権化として所在するが、彼の思考、行動、即ち、生き様は、現代資本主義社会に生きる人間に、生きる真の価値とは何かを直接間接に示唆してやまないものがあるともいえよう。

モームが求めてやまなかった自由というのは物質的自由であり、且つまた精神的自由でもあった。換言すれば、それらは物質的拘束性より脱却することであり、経済的独立性を確保することであり、時間的、空間的行動の保障であり、知的営為の自由であり、感情的憑き物からの解放であった。

コールダーは人間モームの解釈はどんな面でも完璧な肖像といったものではないと述べるが、それだけにモームが多くの点で神秘的な存在になるのは自然なことであった。彼はその生涯を〝隷属と自由〟として考えた。それほど彼は諸々の拘束性を感じ、それから自由になることを求めたのである。この求めは物的次元では確かに成功している。彼は財をなし、その富は彼の行動上の諸々の自由、あるいは知的営為の自由を保障するものであったからだ。だが、富という物によってはどうにもならない精神的な不遇感を彼は生涯にわたって己れの心の中から払拭することはできなかった。

精神の自由は、物的に功なり名を遂げたモームにとっては、求めるべき最大のものであり、喝望してやまざるものであった。だが、所詮、彼にとってそういう自由は達成しがたきものであった。まず、彼は身体的コムプレックスから解放されることは生涯なかった。生来の吃音、短軀、醜面等に対する感情の位置はたえず陰なものであり、それは陰に陽に生涯を通して彼につきまとい、彼を意識的にせよ、無意識的にせよ、心理的日陰者にした。また、彼は幼少時に両親と死別したがゆえに、その一生を通して父母の愛情に飢えなければならなかった。特に、彼のマザーコムプレックスは生涯を通して変わることはなかった。両親喪失と兄弟の離散は家庭というのは何か、家庭の温もり、家庭の欒楽とは何かを身をもって味う機会を彼から永遠に奪ってしまった。牧師館時代、キングズ・スクール時代の冷遇は彼をして対人不信感を否応なくもたせる結果になった。既成キリスト教の伝統的観念主義、教条主義への反動として生じた無神論、そうでありながらもそれに徹することができず、彼は心の底で神をたえず望霓してやまなかった。一旦は否定しながらも、なおかつ神を求めなければならなかったモームの心には信仰への不安がいつもあったのである。彼は神は人間の心の中に宿り、無私に徹した善の実践こそは神性の顕現であるとし、常識が豊かで、並以上の存在をなし、行動力ある人格をもった神を設定するのが関の山で、それを普遍化して、神に対する思惟を深めて行くことはできなかった。その意味で、彼は対神不安の虜となっていたといよう。不幸な結婚生活、自分の子供の血統性にまで疑問をもち、廃嫡をはかるが敗訴するという複雑怪奇な心情、作家としての自分に対する悪評々を考え合わせれば、人間モームが単純明快に解釈することができない極めて複雑な存在であったことがわかる。

モームは物的にも、知的にも、時間的にも、空間的にも自由でありえた。ところが、上にみた複雑で解き難い人間像にうかがわれるように、彼は自己を拘束して離すことのない感情の絆から離脱を試みながらも、それから永遠に解放されることはなかった。本論文で概観してきた四部の長篇はそういう感情的離脱をはかった結果としてのものではあるが、彼は一時しのぎ的なカタルシスを覚えはするが、それは永続するものではありえなかった。所詮、人間モームは自由を求めて永遠にさまよう存在であったのである。

魂魄この世に彷徨いて行くところを知らず、というのがモームの実像であったといえよう。

〔注〕

1. Maugham, H. Sommerset. 1969. *The Summing Up,* Middlesex : Harmondsworth, Penguin Books, pp. 147～148.
2. 田宮虎彦 「モームの設問」『モーム研究』(中野好夫編、英宝社、昭年34年)、pp. 200～201.
3. Klaus W. Jonas「SOMMERSET MAUGHAM AND HIS WORKS」『英語研究』(モーム生誕100年記念誌〈臨時増刊号－1974－4〉、研究社)、p. 33 (孫引).
4. ロバート・L・コールダー著 北川悌二訳『W・サマセット・モーム』(北星堂、昭和51年)、p. 325.
5. 竹内正夫 「月と六ペンス」『モーム研究』(中野好夫編)、pp. 242～243.
6. 山本幸男「モーム文学の特徴」『英語研究』(研究社－1974－4)、p. 41.
7. *The summing up,* p. 125.
8. 同　　書、p. 121.
9. 同　　書、p. 123.
10. 同　　書、p. 198.
11. 同　　書、p. 203.
12. 同　　書、p. 203.
13. 『W・サマセット・モーム』、pp. 39～46.
14. 同　　書、p. 318.
15. 相良次郎「モームの思想体系及び性格類型」『モーム研究』(中野好夫編)、pp. 91～104.
16. *The Summing Up,* p. 202.
17. 相良次郎『モームの世界』(評論社、昭和52年)、p. 41.
18. *The Summing Up,* pp. 50～51.
19. 相良次郎「モームの思想体系及び性格類型」『モーム研究』(中野好夫編)、p. 82.
20. 同　書、p. 211.
21. 同　書、pp. 215～216.
22. *The Summing Up,* p. 203.
23. Maugham, W. Sommerset. 1979. *A WRITER'S NOTEBOOK.* London: William Heinemann Ltd., pp. xv～xvi.
24. ロビン・モーム 著 朱牟田夏雄 竹内正夫 訳『モームと私生活』(英宝社、昭和43年)、pp. 240～257.
25. 同　　書、p. 258.
26. 高見幸郎著訳『サマセット・モーム』(英潮社、1977年)、p. 23.
27. 山本幸男『現代英国作家論』(桐原書店、昭和47年)、p. 7.
28. *The Summing Up,* p. 195.

29. *The Summing Up,* pp. 199～200
30. 『モームの世界』、p. 134.
31. 同　　書、p. 135.
32. Brown, Allen B. 1953. W. SOMMERSET MAUGHAM AS A NOVELIST. (Ph.D. Dissertation). Michigan: University Microfilms ℓnternational, p. 9.
33. 『W・サマセット・モーム』、p. 295.
34. 同　　書、p. 45.
35. Cordell, Bichard A. 1969. *Sommerset Maugham, A Writer for All Seasons.* Indiana: Indiana University Press, p. 55.
36. ジョン・ブロウフィ著 青木雄造訳『サマセット・モーム』（研究社：昭和31年）、p.11.
37. A *WRITER'S NOTEBOOK,* p. 268.
38. 同　　書、p. 330.
39. 『サマセット・モーム』（青木雄造訳、研究社）、p. 8.
40. Maugham, W. Sommerset. 1971. *THE RAZOR'S EDGE.* Middlesex: Harmondsworth, Penguin Books, p. 7.
41. 同　　書、pp. 8～9.
42. 同　　書、p. 5.
43. 『現代英国作家論』、p. 14.
44. 『W・サマセット・モーム』、p. 290.
45. *THE RAZOR'S EDGE,* p. 7.
46. 同　　書、pp. 7～8.
47. 越川正三『サマセット・モーム試論』（臨川書店：昭和49年）、p. 30.

特注

India. Major C. He was a tall, broad-built man, with closecropped brown hair. It was hard to guess his age. He might not have been more than thirty-five and he might have been fifty. He had a clean-shaven face, rather large, but with small features and a short blunt nose. He had an expression of peaceful happiness. He spoke slowly, but fluently, in rather a loud voice. He smiled a great deal and laughed frequently. His manner was cheerful. He was very polite and anxious to do what he could to be pleasant. It was hard to tell if he was intelligent or a little stupid. He was certainly not widely read. There was something of the boy scout about him which was disconcerting; he was childishly pleased when the Yogi came into his room and sat on his chair, and he told me several times that he enjoyed privileges that no other inmate of the Ashrama was accorded. His attitude was a little like that of the schoolboy inclined to boast because he is in the headmaster's favour.

He has been living at the Ashrama for two years and by special favour has been allowed to build his own little shack with a kitchen behind it. He has his own cook. He does not eat meat or fish or eggs, but has a store of tinned goods from Madras to help out with the curry and curds that his cook prepares for him. He drinks nothing but tea.

In his one room is a pallet bed, a table, an arm-chair and another chair, a small bookcase in which are perhaps fifty books. They are translations of works on the Vedanta, the Upanishads and so forth, books by the Yogi and books about him. On the walls are a few small pictures, one of Leonardo's Christ, a few, hideous, of Vishnu, cheap coloured prints and a photograph of the Yogi. The walls are painted green. On the floor a rattan mat.

He wears a sort of Chinese coat and Chinese trousers of white cotton and goes barefoot.

He has an intense adoration for the Yogi and says that he looks upon him as the greatest spiritual figure that the world has known since Christ.

He is somewhat reticent about his past. He said he had no one close to him in England and had travelled a great deal in years gone by, but now, having arrived there, he had reached his goal and would travel no more. He said that he had found peace and (over and over again) that the presence and the sight of the Yogi gave him a spiritual serenity which was beyond all price. I asked him how he spent his day. In reading, he said, taking his exercise (he has a push-bike and cycles regularly eight miles a day), and in meditation. He spent many hours a day sitting in the hall with the Yogi, though often he did not speak more than a few words to him in a week. But he was a strong man in the prime of life, and I asked him whether his natural energy had sufficient outlet. He said that he was fortunate in that he was one of the few persons who had a real desire and liking for meditation; and that he had always practised it. He added that meditation was a strenuous exercise and after spending some hours in it one was physically exhausted and had to lie down and rest. But I could not get from him exactly what he meant by meditation. I could not understand if he was actively thinking of a certain subject. When I put before him the Jesuit contemplation of a particular theme, such as the Passion, he said it was not that at all. He said his effort was to realise the self in him in communion with the universal self, to separate the I that thinks from the self, for that, he said, is the infinite. When he had done that, and really seen, or felt, that the divine in himself was part of the infinite divine he would have reached enlightenment. He was of a mind to stay there till this happened or till the Yogi died.

It was hard to make up one's mind what sort of a man he was. He was certainly very happy. I had thought to discover something of the truth about him from what he looked like and from what he said, but I came away completely puzzled. (『A WRITER'S NOTEBOOK』, pp. 262～264.)

インド。C少佐。背高く恰福のいゝ男で、短く刈った髪は赤茶けている。年齢はとんと分らない。35にならぬようでもあるし、また50のようでもある。きれいに剃った顔は大きい方だが、造作は小さく、短いだんご鼻である。温和な満足げな印象をうける。話す時は、ゆっくりだが流暢で、大声の方である。たえずにこにこしているが声を出して笑うことはめずらしい。動作は快活。非常に上品で、愉快らしくしようと気を使う。一体彼は利口なのか、それともいさゝか愚鈍なのか見当がつかない。たしかに学識は広くないらしい。どこかボーイ・スカウツじみたところがあって、少々面くらわされる。ヨギ（ヨガ教徒。こゝでは誰かその中の一聖者）が彼の部屋へ来て椅子にかけると、子供のような喜び方をした。そうして彼は自分が、アシュラマ（ヒンズー教の修道場、庵。）の他の誰にも与えられない種々の特権をほしいまゝにしているということを、何度も私にくりかえし語った。彼の態度は多少、校長先生に可愛がられるのを自慢する小学生のようであった。

彼は2年間アシュラマで暮した後、特別の恩典で、台所附きの小さな自分の庵をたてることと許された。彼は専用の料理人を使っていた。彼は肉も魚も卵も食わず、料理人が彼のために造るカレーやカード（カレーより少し凝固したもの。）に入れる材料として、マドラスから買って来る鑵詰を貯えてある。飲みものはたゞ茶だけである。

その庵の一室には据えつけベッド、テーブル、肘掛椅子と他の椅子と一脚ずつ、それに本棚があって、中に50冊位の本がある。ヴェダンタ（ヴェダと云うのは四部からなる百巻以上のバラモン教の聖典で、これはそれに基く印度哲学。）、ウパニシャッド（同哲学論）等の翻訳、ヨギの著した幾冊かの書物と、そのヨギについて書かれたもの等。壁には2、3の小さい絵がかけてある。レオナルドのキリスト像の一つ、おそろしいヴ*ィシュヌー神の安っぽい色刷絵2、3枚と、ヨギの写真である。壁は緑色に塗られている。床には籐の敷物。

彼は白木綿の、支那服のような上衣とズボンで、素足である。

彼のヨギ崇拝は大したもので、キリスト以来の、世界における最大の霊的存在と信じている、と語るのである。

自分の過去については、なぜか口を緘している。イギリスには誰も身よりがなく、長いあいだあちこちを随分旅行してまわったが、此の地で遂にゴールへ達したのでもうどこへも行かぬと云った。自分は安住を得たと云い、ヨギの存在と、その姿を仰ぐことが、何物にもかえられぬ精神的な安らぎを与えられるとくりかえし語った。私は、彼が一日をどのように過すか尋ねた。読書と運動（彼は自転車を持っていて、一日8哩規則正しく乗る。）と、坐禅だと答えた。彼は一日の数時間、広間でヨギと共に坐って過す。一週間の間にわずか数語しか話しかけられぬ時も度々なのだが。ところで彼は壮年期の強健な男なのだから、本能的な精力を持てあまさないだろうかと私は尋ねてみた。その點では幸いなことに、自分は坐禅を好んでそれに真実慾望を持つことのできる選ばれた人間で、常にそれを実行しているからと答えた。更に加えて、坐禅は根気の要ることで、数時間つゞけると肉体的に消耗し、その後は横になって休まねばならぬ位だと云った。だが私には、彼の云う坐禅が何を意味しているかよく分らぬし、何か一つの対象について一心に考えるのかどうか理解できなかった。で、ジェスイット教が、たとえば『情熱（パッション）』というような特別のテーマについて黙想することを話してみると、彼は全然それとは違うと云った。彼の努力は、自分のうちにある自我（セルフ）を、宇宙の自我（ユニバーサル・セルフ）と交り得るように現わす事であり、そうしてそういう自我を、かく考える

『私』から切りはなすことだそうである。そういう自我は無限のものだから、と云う。で、彼がそれを遂げ、つまり、彼の裡なる神性が無限の神性の一部になったことを見きわめるかあるいは感じ得た時に、彼は悟りを開くというのであろう。その時まで、さもなくばヨギが死ぬまで、彼はこの地に留まる決心だと云った。

彼は一体どういう種類の男かを理解するのは非常にむつかしい。彼はたしかに幸福そうであった。私は、彼の様子や彼の話した事柄から、彼について何らかの真実を発見しようと考えてみたが、全く不可解で、やめにした。

* バラモン教に三神あり、最高神ブラーマ（又はブラーマン）が世界創造神。第二神がヴィシュヌーで世界保存神。第三神シヴァが世界破壊神。現在はヴィシュヌーが最も信仰される。尚、ブラーマやシヴァもこのあとの項に時々出てくる。　（中村佐喜子訳『作家の手帖』、pp. 205～206.）

48. *A WRITER'S NOTEBOOK,* p. 288.
49. 『サマセット・モーム試論』、p. 30（孫引）.
50. *THE RAZOR'S EDGE,* p. 272.
51. *The Summing Up,* p. 141.
52. 同　　書、p. 134.
53. *THE RAZOR'S EDGE,* pp. 56～57.
54. 吉村信亮「剃刀の刃」『サマセット・モーム』（朱牟田夏雄編、研究社：1966年）、p. 121.
55. *THE RAZOR'S EDGE,* p. 52.
56. 『サマセット・モーム』（英潮社）、pp. 94～95（和文）、pp. 36～37（英文）.
57. *THE RAZOR'S EDGE,* p. 36.
58. 同　書、pp. 36～37.
59. 同　書、p. 54.
60. 同　書、p. 51.
61. 上田敏『モーム』（研究社：昭和44年）、p. 26.
62. *THE RAZOR'S EDGE,* p. 50.
63. 同　書、p. 54.
64. 同　書、p. 71.
65. 同　書、p. 77.
66. 『W・サマセット・モーム』、p. 320.
67. *THE RAZOR'S EDGE,* p. 78.
68. 同　書、p. 91.
69. 同　書、pp. 163～164.
70. 同　書、p. 170.
71. *The Summing Up,* p. 179.
72. 越川正三『サマセット・モームの文学』（二玄社：1966年）、p. 79.
73. 同　書、p. 79.

74. *THE RAZOR'S EDGE,* p. 209.
75. 同　書、pp. 209～210.
76. 同　書、p. 252.
77. 同　書、p. 254.
78. *The Summing Up,* p. 203.
79. *THE RAZOR'S EDGE,* p. 256.
80. 同　書、p. 264.
81. *A WRITER'S NOTEBOOK,* p. 285.
82. *THE RAZOR'S EDGE,* p. 265.
83. 『モームの世界』、p. 255.
84. 小口偉一 堀　一郎監修『宗教学辞典』（東京大学出版会：1974年）、p. 211.
85. 同　書、p. 211.
86. *THE RAZOR'S EDGE,* pp. 268～269.
87. 同　書、p. 269.
88. 『宗教学辞典』、p.757.
89. *The Summing Up.* p. 181.
90. 同　書、p. 182.
91. 同　書、p. 165.
92. *THE RAZOR'S EDGE,* p. 269.
93. 同　書、p. 269.
94. 同　書、p. 270
95. 同　書、p. 270
96. The *Summing* Up, p. 203.
97. 同　書、p. 179.
98. 高見直道『哲学の基礎知識』（青春出版社：1974年）
99. *THE RAZOR'S EDGE,* p. 273.
100. 同　書、p. 275.
101. 同　書、pp. 275～276.
102. 越川正三『サマセット・モームの全小説』（南雲堂：1972年）、p. 182.
103. *THE RAZOR'S EDGE,* p. 77.
104. 同　書、p. 277.
105. 同　書、pp. 278～279.
106. 同　書、pp. 279～280.
107. 同　書、p. 280.

108. 『サマセット・モームの全小説』、pp. 186～187.

109. *THE RAZOR'S EDGE,* p. 281.

110. 同　書、pp. 281～282.

111. 同　書、p. 313.

その他の参考文献

Maugham, W. Summerset. 1971 *Liza of Lambeth.* Middlesex : Harmondsworth, Penguin Books.

Maugham, W. Summerset. 1971. *The Painted Veil.* Middlesex : Harmondsworth, Penguin Books.

Maugham, W. Summerset. 1967. *Catalina.* Middlesex : Harmondsworth. Penguin Books.

Maugham, W. Summerset. 1966. *A Case of Human Bondage.* London : Secker & Warburg.

Maugham, W. Summerset. 1936. *OF HUMAN BONDAGE.* New York: Doubleday & Company, Inc.

W・サマセット・モーム著 中村佐喜子訳『作家の手帖』（新潮社：昭和32年）

W・サマセット・モーム著 中野好夫訳『かみそりの刃・月と六ペンス』（講談社：1975年）

W・サマセット・モーム著 大橋健三郎訳『人間の絆』（河出書房新社：昭和47年）